
ウルトラマンゼロ～銀河を駆ける天馬～

銀色の闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンゼロ／銀河を駆ける天馬

【NZコード】

N1843W

【作者名】

銀色の闇

【あらすじ】

天馬 ペガサス の鍵には二つの意志があつた・・・一方は平和を願い、純白の心を持つ姫 プリンセス・ライト だが、もう一方は破壊を望み、漆黒の心を持つ姫 プリンセス・ダーク 人が嫌いな少女が光の国へ来て何を見つけるのか？ウルティメイトフォースゼロは天馬 ペガサス の鍵を帝王・ベリアルから守れるのか！？

天馬の鍵と光の国（前書き）

初めまして、銀色の闇です^ ^
投稿が遅くなつてもどうか温かい目で見てもうえると嬉しいです。

天馬の罐と光の国

十年前のとある事件・・・それが私の運命を大きく変えた・・・

ザワザワとテレビで聞こえる人々の悲鳴。子供の泣き声、メディアどもの騒ぎ声、カメラの音、偉い人の記者会見、そしてパパとママを乗せた飛行機が落ちていく映像。その時の私の頭の中は驚くぐらいたまらなく白になつた。すべてを失う感じとはこういう感じなのだろうか・・?私は五歳ながらもその感情を知つてしまつた。家の家政婦さんもおろおろしながら、心配そうに私を見る。

((やめてよ・・そんな風な目で見ないでよ・・・))

2

だけど、口は動かなくてただ私はテレビの前で叫ぶように呼んだ。

その声は天には届かず、憎いほど真っ青な空に消える。

~~~~~ ! ! !

？？？「ん～・・・夢か・・・」

そつと田覚ましボタンを押し、音を止める少女。田を擦りながらだらしなく欠伸をする。そつそとパジャマから私服に着替える。ジヤージと同じ素材でできた黒く動きやすそうな半ズボンと青色のTシャツと言つかなりラフな格好だ。最後に薄紫色の不思議な色と形したペンドントを首にかける。

？？？「いただきますー」

適当に作った田玉焼きとパンを食べ、テレビをつけ食事を続ける。そのテレビのニュースの左下には『10年前の謎の飛行機事故の真実』と大きな見出しが張つてある。飛行機を研究している教授はこう偉そうに説明している。

教授「この事故の原因はエンジントラブルが原因でしょう。  
…そして…なにより…」

？？？「…・・・・・」

私はウザそうな顔をしてリモコンを取り、ピッとチャンネルを変えた。

? ? ? ( ( チツ · · · あいつのせいで気分最悪 · · · ) )

私は梅崎光、15歳。今年で高校一年生だ、今は夏休み真っ盛り。でも私は友達がいなく、ほんと家にいる。私は他人と触れ合うのが嫌いで、外ではほとんど仮面。人を信じてもらくなことがないと知っている暗い後ろ向きな奴だ。私がこうなったのは10年前を起きた飛行機事故のせい···全員死亡という大きな飛行機事故、それには私の父と母も乗っていた。私の5歳の誕生日を祝うため、急いで海外での仕事を終わらせ日本に戻るとしていた。でも、それは叶わなかつた···。事故の原因は整備不良と発表された。でも、私はもつと違う嫌な物を感じた···多分気のせいだと思うけど···。

? ? ? 「きゅー?」

私の足元から可愛い顔を覗かせるモンブラン色のリスがいる。

光「おいで、リリー」

「いっしはリリー、私の唯一の家族で親友。両親が亡くなつた後、寂しくないようにと親戚の人ぐくれた物だ。リリーは昔、病気を持つていて、他のより毛の色が少し薄いのはそのせいだ。でも、今はそれが嘘のように元気に走り回つていて。

光（（ああ・・・！本当、動物つていい！裏切らないし、可愛いし！！））

本当、人間とは大違ひ！人間は、信じようと努力してゐる上ですぐ裏切るし、暴言や暴力、あるいは権力で人を傷つける、そしてその傷つけられた人もまた人を傷つける・・・。なんで人々はそんなことにする、気づかないのかしら？ただの悪循環じやない・・馬鹿らしい・・。

光「まあ・・・」んなこと思つても仕方ないか・・」

そう呟いて、何気なく上に飾つてある時計を見ると十時を過ぎていた。

光「ヤバッ・・！」

急いでコップや皿を台所に持つていき、パンをなどしまい、大き

い買い物袋を持ち玄関に向かった。光は慣れた様子でバックを開け、リリーを手招きする。

光「リリー、GO!!」

リリー「キュー！」

リリーも慣れた様子でバックの中へと入る。リリーは賢いのかお店の中に入ってる時は、いつも静かだ。光は、リリーが入ったのを確認すると、急いでお気に入りのスニーカーを履いて家から出た。もちろん、鍵をかけるのも忘れずに。

光「よっしゃ～・・・！」

今日は近くのよのずやさんで特売をやっているのだ。光はいつもここで買い物をしている。幸い、父と母は莫大な遺産があり食べ物や住む家にも困らない。昔は家政婦がいたがお金ができるだけ節約したいため、やめてもらつた。でも、どこで噂を聞いたのかよく詐欺などそういう手の者がくる。子供なので甘く見られるのが大嫌いなのだ、だから光は怪しいと思った者には、警察をすぐ呼んで、よく返り討ちにしている。

光「今日は肉や野菜の特売日……」

よひすやに到着し、さつそくお皿当ての物を買ひ。その後には、ペシトショップにリリーの餌を買いに行き、色々な場所へと寄り道し帰るのが夕方辺りになつた。

光「ああ～・・疲れた」

たくさん荷物を抱え、家へ真っ直ぐに帰る光。そんな時、ぐにゃりと道が歪むように黒い異空間のようなものが現れる。

光「何これ・・？」

興味本意で触ろうとした時、頭の中に声が聞こえた。

？？？（（いけない！…それから離れてください！））

だが、時は既に遅く、光は何か黒い触手に手を掴まれた。黒い歪みの中から恐ろしい姿と声ができる。

？？？『やつと見つけたぞ・・・天馬の鍵・・・』  
ベガサス

光「何！？何なのよ！これ！！」

必死に抵抗するが、触手は離れず逆にずると光を黒い歪みに引きずり込む。歪みの中から邪悪な風に伸びきった鋭い爪をした巨 大な手が現れる。

？？？「俺様の手に・・・へむづりテ・・・」

その声に答えるかのようにペンダントの石が光を放ち、巨大な手を弾く。

? ? ? 「何ツ!?

ペンドントから古代文字みたいのような不思議な字が光を包み込む。ピカッと眩い光を放ち、その場から黒い歪みも光の姿も消えた。

光「えっ？うわああああああああああ！」

光は自動転送され、今空から下に落ちていた。

光（（やばいーー）の距離から落ちたら死ぬつてーー）（

光「きああああああ！－！」

持っていた荷物にしがみつき、死ぬ覚悟をした時だつた。ポンツと誰かに受け止められたような感じがした。ゆっくり目を開けるとそこには巨大な炎の巨人、グレンファイヤーが不思議そうに光を見た。

グレンフヤイヤー「なんで地球人がこんなとこにいんだ？」

光（（な、何これ……！？3D……？）いやこんなリアルなのは無理か……）

実は、光はウルトラマンというものを知らない。できるだけ外の世界と触れ合いたくないのでニュースは必要な時以外見ない。

光（（とにかく逃げな）と・・・）

光はバックをあさると有るものに目が止まる。タジ飯に食べようと思つていたオレンジだつた。光はこれだと思い、皮を剥き、効くかどうか迷つたけどグレンファイヤーにそれを向けた。

グレンファイヤー「ああ？なんだ？」

光「喰らえ！…」

ぐしゃっとグレンファイヤーの目の前で潰した。ペチャリとグレンファイヤーの顔全体にオレンジの汁が飛び散つた。光はハラハラした。

光「き、効いたか・・・？」

田なんか分からぬわよ～！…と心の中で叫ぶ光。

グレンファイヤー「いっ、痛えええええ～！！！」

光（（き、効いた！－！－））

グレンファイヤーは田を抑え、急降下し光を適当に地面に下す。

光「よし・・・しめた・・・！」

荷物を持ち、ささつとその場から近くの草木が生えているところに身を隠す光。グレンファイヤーは顔を擦り、光を睨む。

グレンファイヤー「痛つてえな！何すんだって・・いねえし！」

！」

## 天馬の鍵と光の国（後書き）

ゼロ「ん？今なんか空が光ったような・・・？」

レオ「こりあー訓練中によぞ見するなーー！」

レオの蹴りがゼロの顔を掠る。

ゼロ「つて危ねえなーー！」

ゼロは怒りを露わにする。

レオ「よそ見する方が悪い」

ゼロとレオは光の国にある特殊なバトルエリアで手合わせをしていた。

レオ「それとも、セブン兄さんの説教でも聞くか?」

ゼロ「ツーおい!ズルいぞ!オヤジの名前を出すなんて!-!」

ゼロはセブンの説教が苦手だ。正座をさせられて、その上2~3時間がみがみと説教させられ、訓練の時よりずっと疲れる。この前は足がビリビリ痺れ、ひどい目にあつたばかりだ。

レオ「だつたら、頑張るんだな」

ゼロ「他人事みたいに言ひやがつて!-!」

レオ「他人事だ」

ゼロ「ツー!-!-/!/-/つるせえ!-!」

ゼロはレオに遊ばれてるとも知らずに頑張るのでした。

## リリー、行方不明

森の中に姿を隠し、安堵の息をつく。光。バックの中の大変な相棒に声を掛ける。

光「助かつた！たくつ・・なんなのよ・・あれつ・・！・・！・・ねえ？リリー？・・・」

光はリリーに声を掛ける。でもいつまで経っても、バックの中から姿を現さないリリー。おかしい、いつもだったらすぐ出てくるはずなのに。光は必死にバックの中を探る。

光「リリー・・・?どこのリリー・・・!・?冗談やめて出てきてよー！」

光は一生懸命にリリーの姿を探すが出てこない。その時、光の頭の中に嫌な予感が浮かぶ。

光「まさかっ・・！」

もしさつきの落ちる時に空の上ではぐれていたら・・・?

光は荷物のことなど忘れて、ただ高い建物が建っている方に走りだした。多分リリーがいるならあそこだと感じて。

光（（嘘でしょ・・・？リリー・・・あなたも私を裏切るの？私をあの暗くて何も見えない世界に戻すの・・・？））

知らない内に目尻が熱くなつた。可笑しいな、こんな感情を捨てるために人を嫌いになつたのに・・・？

光「お願いよう・・・リリー・・・！私を・・・私を一人にしないでよっ！！」

ああ、あの時と同じだ・・・また私は大事なものを失つてしまうのかしら・・・？

あの時の暗く、寂しくたつた一人ぼっちの世界にはもう戻りたくない・・・！

一人、少女は光の国に行く・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゼロ「ふう～・・・」

午後のレオとの特殊訓練は一番キツイゼロ。そんなゼロを可笑しそうに見るレオ。

ゼロ「んだよ・・人の顔ジロジロ見て・・」

レオ「いや、お前も随分変わったなと思って・・」

ゼロ「はあ？」

「さなりそんなことを言われたので顔を隠めるゼロ。

レオ「昔、よく一人で突きつて無茶ばつかしてたお前がこんな

に立派になつて・・仲間もできて・・性格も昔より丸くなつたし

ゼロ「悪かつたな・・・、性格悪くて・・・」

不機嫌そうに顔を逸らしているが、レオは知つている。照れい  
るのだ、ゼロは。裏ではよく陰口を叩かれていたゼロだ、きっとこ  
ういつのには慣れていないのだろう。

ジャンボット「失礼します」

そんな中、ウルティメイトフォースゼロの一員ジャンボットが來  
た。

ゼロ「どうしたんだ、ジャンボット？」

ジャンボット「いや、ウルトラマンセブンとヒースから至急ウル  
ティメイトフォースゼロを集めて宇宙警備隊本部に来いとの命令が  
来てな・・」

ゼロ「わかつた・・・レオ・・・！」

レオ「わかつている、行って来いゼロ」

ゼロ「ああ・・・！」

そう言つてジャンボットと一緒に空に消えるゼロ。レオはその姿を優しく見守つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

宇宙警備隊本部につくとそこにはウルティメイトフォースゼロの二人ミラーナイトがいた。

ゼロ「ミラーナイト！」

ミラーナイト「ゼロー久しぶりですね！」

ミラーナイトはエメラナ姫の護衛、ゼロは訓練に忙しく最近会つていなかつた。

ジャンボット「そう言えればグレンファイヤーは？」

〃ラーナイト』いや、私は知らないな・・・

ゼロ「俺も」

そんな話をしてる中、ウルトラマンセブンとウルトラマンエースが何か難しい顔をして入ってきた。

セブン「ん・・・? 一人少ないような・・?」

〃ラーナイト』すみません、一人不在でして・・・

ジャンボット（たぐつ・・・何やつているんだ! あのアホは  
! ! ! ）

Hース「まあいい・・・今は時間がない、取り合えず話そいつ

若干、Hースの声がいつもより焦つている。ゼロたちは何か起きたということを感じ取った。

Hース「POINT・4849ヒリアに超高密度エネルギーを

確認した。君たちには、調査および辺りの探索を頼む

セブン「本当なら実習生を行かせるべきなのだが」このバリアを破つたぐらいだ、危なすぎる。我々も忙しく様子を見にはいけない。この件をウルティメイトフォースゼロに任せたいと思つ

ゼロ「わかつたぜ、オヤジ」

快く依頼を引き受けるゼロ。後ろで//ライナイトは何かを思い出すような難しそうな顔をする。

//ライナイト「でも確かPHANTOM・4849とは・・・」

Hース「ああ、あそこだ」

Hースはゆっくりと光の国の真ん中の空を描す。

ゼロ「あんなところへ？」

Hース「では、頼んだぞ。ウルティメイトフォースゼロの諸君たちよ」

そう言い残し、その場を後にするエースとセブン。セブンはその場から出る時、ゼロに探知機を渡した。

「これは・・・」ゼロ「

セブン「これで超高密度エネルギーが発生した場所が分かるはずだ」

ゼロ「わかつた」

セブン「じゃあ後は任せたぞ」「

ゼロは探知機を手に取り、空を見上げる。

ゼロ「よし！ウルティメイトフォースゼロ出動だー！」

「ヤンボット・ワーナー」「ねむーー。」



## ウルトラマンゼロと地球人の出会い

光「…………」

ほとんど建物がまるで東京みたいなでかいビルばかりだが、やはりここは日本ではない違うところと言つことが周りの雰囲気から感じられた。

光（（何も考えずにここまで来ちゃつたけど……これからどうするか……それにしてもさつきから））

ヒソヒソ話が雑音のように聞こえ、突き刺さる視線は蜂の針みたいにチクリと体に刺さる。

光（（目線がめっちゃ痛い……））

次々と通り過ぎるウルトラマンからまるで珍獣のよつかの目で見られている。本当、一人でここを通過のはきつい。

光（（踏みつぶされそうになるわ、目線は痛いわ、そして何より上から目線がムカつくわ……））

光「はあ～……今日は厄日だな」

「ひざひざした顔でしづらへ歩き続けると、上の建物から微かに何かの鳴き声が聞こえる。光はこの声を知っている。

光「リリー・・・？」

よく見ると隙間に小さな何かが建物のてっぺんにしがみ付いている。

光「あれってもしかして・・・！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゼロ「ハーン・・・」

ゼロたちはわざわざPOINTER・4849エリアの調査に来だが、わざわざから探知機は全く反応しない。

「ワーナイト」「おかしいですね・・・？あれほどどの超高密度工ネルギーに反応しないなんて・・・」

ジャンボット「その探知機壊れているんじゃないかな？」

全く反応がない探知機を渋い顔で見るジャンボット。

ゼロ「辺りにも変わった様子もないしな・・・」

周囲を見渡すがこれほどと言つて怪しいものは見当たらない。いつもと何の変りもない。ミラーナイトは、思いついたように自分の意見を言つた。

ミラーナイト「もしかして、あの超高密度エネルギーは何かの物体から引き出されたものなんじゃないですかね？」

ゼロ・ジャンボット「え？」

ミラーナイト「これは私の推測ですが、超高密度エネルギーを体内に持つもの、あるいは自然に起つたものなら必ず痕跡があるはずですが、今回は全くその跡が見当たりません。でも、超高密度エネルギーから出来た物体になら外に漏れた超高密度エネルギーをしまいこむことができます」

ゼロ「つまり、その超高密度エネルギーを入れられる箱みたいなものがここに落ちたってことか？」

「ハーナイト」簡単に言えれば、うつむき目ですね

ジャンボット「じゃあ、早く見つけ出そう! そんなものが落ちていたらこいつ懸念されるかわからなーいからな」

もう言ご、ウルティメイトフォースゼロたちは光の国に降り立つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

グレンファイヤー「よー、お疲れさん」

地上に降り立つた時、いつの間にグレンファイヤーが田の前にケロッとした様子で立っていた。

ジャンボット「お疲れさんじゃないーーお前はいままでどーこに行つてたんだーー」

グレンフヤイヤー「つむせえなー、焼き鳥。俺にも色々合った  
んだつーのー。」

ジャンボット「だから、私は焼き鳥じゃないー。ジャンボットだ  
！いい加減名前を覚えたらどうだーー！」

これ以上この二人をほつといたら乱闘になりそなので急いで  
ラーナイトが仲裁に入る。

ゼロ「はあー・・・」の先づまくやつていけんのか・・？」

ゼロが呆れた風に溜息をついてみると、ざわざわと集まり、騒ぐ  
ウルトラマンたちの声が聞こえる。

ゼロ「なんだ・・?あれ・・」

気になつて近くに行つてみると野次馬の中でウルトラマンメビウ  
スがいた。

ゼロ「おい！メビウス」

メビウス「あーゼロ」

野次馬たちを避けメビウスのじるに近づくゼロ。

ゼロ「一体何なんだこの騒ぎ?」

メビウス「ああ、あれを見てくれ！」

メビウスに指された方向を見るとそこにはビルのてっぺんに固ま  
りついてる何かが見える。

ゼロ「あれは・・・地球人！？でも、なんでこんなところに・・・

グレンフヤイヤー「ああーーーあいつーーー」

突然大きな声を上げ、ビルのてつぺんをわなわなと指すグレンフ  
ヤイヤー。

「ラーナイト」ビビッドでしたですか？そんないきなり声を上げて・。「

グレンファイヤイヤー」「どうしたかいつしたもねえーあいつに変な液体かけられてせいで俺は・・」

ジャンボット「はあ？ 液体・・？ なんのことだ？？」

ゼロ「取り合えず見に行くか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

光（（ひいいいい！――――――――））

ループルと吹き寄せれる風につぶと滑りやすこ足元。命綱さえ着けていない今、もうこの二十盤べりこの高さから落ちたら確実に死ぬ。

光（（コニーを助けたのはこいけど、その後のこと全へ考えてなかつた！――））

リリーを片手に持ち、パルパル震えているとウルトラマンたちが異変に気づき集まってきた。最悪だと思っていると野次馬たちの中から何か猛スピードで近づいてきた。

光（（ん？））

目の錯覚かと思い目を擦り、もう一度見ると突如目の前に巨大な顔がこちらを覗くように見ていた。

ゼロ「こんなところで何やつてんだ、死ぬぞ」

できるだけ相手を怖がらせないよつてゼロは声を掛け、手を差し伸べるが

光「いやあ！触らないで！」

反射的に落ちないよう握っていたてつべんの棒を離してしまつ

光「きやああああああ——！——！」

ゼロ「しまつたつ・・・」

急降下する光の体を追いかけ、手を伸ばすが、体が小さくつまく狙いが定まらない。

ゼロ（（）のままじや・・ぶつかる・・・）

ゼロがそう思った時、突然少女のペンドントから光が発する。

光「天馬の鍵よ・・我、純白の姫が命ずる・・・」  
（ベガサス  
プリンセス・ライター）

確かに光の口からその声は出でていたが雰囲気がゼロとなく違う。だが、ペンドントはその声に反応するかのように点滅をし始める。

光「我を守り、その力を示せー！」

そう呟くように言いつとペンドントから文字が浮き出で、やがてそれは光の球体になり、白い球体が彼女の体を包み込んだ。

ゼロ「何つーーづわあーー？」

眩しく輝く光がゼロの視界を遮る。

ジャンボット「一体何が起こっているんだ！」

地上にいるジャンボットたちもあまりの眩しさに手で顔を抑える。球体がゆっくりと地面に降り、球体はまるで卵の殻のように割れ、中から閃光と共に少女が現れる。

光「…………ってあれ……？なんでこんなところにいたってうわあ！」

巨大な足と顔がこちらを一斉に凝視している。

光（（怖い！…））

ウルトラマンを全く知らない光にとってはウルトラマンも怪獣のようにしか見ないのである。そんな状況の中突如足が地面から離れる感覚に襲われた。それはそうだ、なぜならゼロが光のTシャツの部分を掴み、摘み上げているのだから。

光「うわあ！」

ゼロ「お前一体何者だ?何の目的で来た!」

光「は・な・せ!私に触れるな!近づくな!..」

ジタバタヒリリーを抱きながら暴れる光。んつ・・・?ちょっと待てよ・・今この怪物喋つた?あれ・・?確かにさつき会つたあの暑苦しい怪獣みたいなのも喋つてたような・・?

光「ねえ、あんた喋れるの?..」

ゼロ「?..当たり前だ」

光「怪物なのに?..」

ゼロ「怪物?違う!俺たちは光の国の戦士、ウルトラ戦士だ!..」

光「はあ?ウルトラ戦士?何それ・・?取り合はず、ダサイ」

ゼロ「なんだといつー..」

「ハーナイト」まあまあ…落ち着いてください、ゼロ

またも仲裁に入るハーナイト。

「ハーナイト」取り合えず、その子を本部に連れて行きましょ  
う

ジャンボット「そうじよひ、ゼロ」

ゼロ「わーてつるよー」

睨みつけるように光を見る。光を擒み上げたまま本部へと向かう  
ワルティメイトフォースゼロ。

光「だから…・・・私に触るなアアアアア！…！」

光の怒号と野次馬をその場に残す・・・。

## 少女の記憶の欠片

エース「知っていることだけでいい・・我々に話してくれないか？」

光「だからあ、知らないつーの！」

宇宙警備隊本部に連れてこられた光はエース、キングに尋問を受けていた。ウルティメイトフォースゼロはその様子を見ている。

キング「でも、君のペンダントから確かに超高密度エネルギーが感知されている」

キングの片手に持っている探知機がとてつもない超高密度エネルギーを示している。

光「そんなこと言われたって本当に知らないのよー！」がどこかも、今私がどこにいるのかも！」

エース「こゝは、M7-8星雲光の国といつ星だ。君の知つてい  
る場所じゃない」

光「はあ～！？」

ヤブン「君はどうやってこの星に来たんだ？」

光「それも知らない・・ただ私はあの黒い影から逃げようとした  
死で・・」

? ? ?『やつと見つけたぞ・・天馬の鍵よ・・』ベガサス

ぶるり・・・！あの声を思い出すだけで背筋が震え上がる。そう。  
・ もう面倒事は『めんよ！』

ゼロ「おー、どうしたんだ？」

光「・・何でもないわよ

ゼロ「どう行くんだよー。」

フライと会議室から出て行く光を止めるゼロ。

光「私がどこへ行こうと私の勝手でしょう、ほつといて」

グレンファイヤイヤー「なんだと！それが心配してやつてる奴に言うセリフかっ！」

光「誰もそんなこと頼んでないし、恩着せがましく言わないで。結局、ウルトラマンも同じね、自分勝手で強欲で馬鹿な人間と！」

グレンファイヤイヤー「てめっ・・・！」

〃ラーナイト「お、落ち着いてくださいー。グレンファイヤイヤー」

ジャンボット「そうだ、相手は地球人だぞっ！」

光「ふん・・・」

必死に殴りかかるグレンファイヤイヤーを一人係で止めるミラーナイトたち。光はその場から立ち去ろうと背を向けたが、また声が掛かる。

トース「じゃあせめてそのペンダントだけでも貸してくれないか？」

光「何言つてんの！ そんなの無理に決まってるじゃない！」

さつきまでそんなに感情を見せなかつた光が嘘のように声を荒上げ、威嚇する。まるで、卵を必死に守ろうとする鷹のように。ウルトラマンたちもその剣幕な表情を見て、ビックリしている。だけど、ゼロは負けじと声を出す。

ゼロ「そんなわけのわからない物持つてたら危ねえだろ！ 第一、なんでダメなんだ！ 訳を言え！…」

光「これはねえ…！ あれ…？」「これは…？」

光（（これは誰から貰つたんだけ…？））

なぜだろう？ これは確かに大切な物のだ。でも誰に貰つたのか、いつどこで、何で貰つたのかさえも覚えていない。なんでだろう…？ とても大切な物はずなのに…。私何か大切なことを忘れ…。

光「あつ…うつ…ツ…」

その時だつた、私の頭の中に激しい頭痛が襲う。何かの記憶が私の頭にフラッシュバック現象のように入り込んでくる。テレビの砂嵐のように掠れてて顔までは、はつきりわからない。でも、なぜか私は知つている。

? ? ? „お母様・・お父・・様・・! 私今・・日ね・・・』

? ? ? „見て・・見て・・! ビー・・・ス・・ト』

? ? ? „こっちよ・・! アハハ・・ハ・・・!』

無邪気に笑う少女。まるで一輪の花みたいに素敵な笑顔だ。私より少し小さい・・そう・・中学生ぐらいかな?

? ? ? „こ・・らつ・・また・・』

? ? ? „し・・た・・・ないわねえ・・・』

は・・・』

？？？『そり・・で・・ね・・・は・・』

誰・・?』の人たち・・男の人が一人・・?女の人もいる・・

なぜ・・?こんなに幸せな気分になるんだろう・・?私じゃない  
のに、なぜ・・?

ゼロ「おー・おー・どうしたんだーー」

光「うつ・・・ううーー」

光が頭を抑え膝をつき、苦しむのと同時にペンドントも輝く。エ  
ースの持つ探知機もそれに反応し、さつきから物凄い異常値を発し  
ている。

ヤブン「一体どうしたと嘗つただー?」

? ? ? ?『逃げ・・・う・・・おお・・・』  
『..』

辺りが煉獄の炎に包まれていく

民衆たちは何もできず、悲鳴を上げ、どんどんと焼死んでいく。

? ? ? ?『なんど・・・?なんど・・・こんなことに・・・』

笑顔がとても素敵な女の子が泣いている

真っ白の純白なドレスは黒く煤が付き、とけじるの焼き焦げ  
ている

だが、そんなこと気にせずただ少女は泣き叫ぶ

本当・・なんでこんなことになってしまったんだひつ・・?

なんで・・！なんでつ・・！

必死に手を伸ばすが虚しくもあの子には届かない・・

? ? ? 『い・・のち・・・かえ・・も・・守る・・・・』

画面がどんどん砂嵐のせいでき見えなくなり、掠れしていく

少女は最後の力を振り絞り、体から光を放った

・  
『？？？『クラウン・クラウン王の王冠』だけ・は・・・う、ああああ！…』

悲痛な叫びと最後の言葉も残して・・・

少女は姿を消した

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゼロ「しつかりしりーおこつーーー！」

光「うつ・・・あ・・・！・・・」

何かを伝えようとパクパクと口を動かす光。

ゼロ「どうしたんだ！？何が言いたい！」

光「天・・馬の・・鍵つ！・・導くのは・・・三つの・・鍵・・  
！」

ゼロ「どういう意味だ・・・？」

突然言われた言葉に戸惑つたが、光が途端に苦しむのをやめた。  
光「あれ・・・？私・・・」  
ゼロ「だ、大丈夫なのか？」

光「え？ええ・・まあ・・」

頭を抑え、立ち上がり外へ向かう光。

ゼロ「なあ、さつきの言葉はどういう意味だ」

光「はあ？何言つてんの？私あんたになんか言つたけ？」

怪訝そうな顔でゼロを見る光。どうやら嘘をついてる様子はない  
よつだ。

光「・・・・・」

ゼロ「つて・・どこの行くつもりだ！」

光「・・つたぐ！外で風に当たりに行くだけよ……まったく煩  
いわね～！」

さう言い残すとさつと外へ消えて行ってしまった。

グレンファイヤー「なんだつたんだ～？あの女・・」

セブン・エース・キング「「「・・・・・」」

三人は無言のまま頷き合つて、ウルティメイトフォースゼロに向  
き直る。

キング「君たち諸君に新しい任務を言い渡す・・・」

ゼロ「新しい・・・」

ミラーナイト「任務ですか・・?」

キング「そうだ・・。君たちにはあの地球人の護衛および監視  
に付いて欲しい・・!」

ゼロ&グレン「「はああああああああ!-!-!-?」」

ジャンボット「あ、あの地球人のですか・・!?」

エース「迷子になられては困るからな」

グレン「俺は嫌だね！いつからウルティメイトフォースゼロは便利屋さんになつたんだよ！！」

ミラーナイト「まあまあ、任務なんですか」

グレン「嫌だああああ！！！」

まあ・・グレンはミラーナイトに任せて問題はあの光と言つ地球人だな。

ゼロ「地球人はみんなあんなのなのかな？」

セブン「いや、逆にああいう風の方が珍しい」

父、セブンが一つの間にか自分の隣に立っていた。

セブン「まるであの子は昔のお前みたいだ・・・・」

ただ力を望み、仲間も作らず、禁忌にまで手を出そうとしたお前に・・・

ゼロ「俺が……あこつて……」

セブン「だが、大丈夫だ。お前は仲間ができた、守りたいもの  
も

ゼロのカラータイマーの辺りに向かって軽く拳をつけるセブン。

セブン「お前だけは必ずあの子を信じてやれ

ゼロ「オヤジ・

セブン「周りの奴が疑つてもお前だけは信じてやれ、でないと  
彼女は絶対お前に心を開かない」

ゼロ「あ……！」

さきまでのちやもやが嘘のように晴れて……やっぱり、オ  
ヤジはスゲエ・

セブン「それにしても驚いた

ゼロ「？？何がだ

セブン「お前もグレンと一緒に殴りかかると私は思つたんだが・」

ゼロ「なあ！？／＼／＼／＼俺はそこまで子供じやねえええ  
！」

セブン「ハハハハ・・・！」

二人のウルトラマンの親子の声が綺麗な空に響く。

少女の記憶の欠片（後書き）

セブン「やつと言えば、ゼロ・・あの子はさつき何か言ってなかつたか？」

ゼロ「いや、意味不明なことなら言つてたぜ・・・」

セブン「意味不明？どんなことだ」

ゼロ「ええっと・・確か・・天馬の鍵・・導くのは三つの鍵とかなんとか」

セブン「ペガサス天馬の鍵か・・・」

セブン（（何事も起こらなければいいんだが・・・））

## 愛を忘れた子

ゼロ「あいつ・・・どこまで行つたんだ・・・！」

ゼロはいつまでも戻つてこない光を探していた。この建物の中にいるのは間違いないのだが。

ゼロ「ん・・?」の声は・・・」

歌が微かに聞こえる。その声を頬りにし、行くと何百階もある建物で命綱なしで平気な様子で空に足をブラブラと出している光の後ろ姿があった。ゼロはすぐに注意しようと近づくが、光の後ろ姿がさつきまでとまるで違つた。凜として強気な生意気娘だったのに今その後ろ姿はいつ壊れてもおかしくないぐらい果かなかつた。表情も悲しそうで歌を口遊んでいた。

ある昔 ある時代

迷子の一匹の天馬が 泉で羽を休ませた

泉にいつも移るのは 空を駆ける星々たち

天馬が通れば、地が潤い、湖は清らかに、草木は恵まれん

天馬は孤高の騎士　いつも一匹　いつも孤独　いつも仲間を探した

だが、

誰もが天馬を欲し　命を狙い　傷つけた

怒り狂つた天馬は　復讐を誓い　いくつもの国を滅ぼした

天馬が地を駆ければ　地は崩れ、國の王たちは死んでいく

天馬が空に羽ばたけば　風が荒れ狂つた

天馬が人を呪えば　人々が死んでいった

人々は許しを請うが　天馬は人々を苦しめ続けた

羽は黒く、霞み　穢れ　天に戾れぬと　天馬は嘆いた

赤き瞳から 血を流し、植物は 悲しみに枯れていった・・

天馬は 国を作り 傷を癒さんと 眠りについた そして 封印された

国の 囚われの姫プリンセス

白木蓮はくもくれんのドレス着て 今日も嘆き、唄うたつ

決して目覚めらせてはならぬと… 哀れな天馬を

次 扉開くとき 運命は死に 王の印 目覚めん

ゼロ「・・・・・」

光の口から綴られていく歌。ゼロは思わずその場で立ち去くした。  
光はゆっくりと後ろを振り返る。

光「盗み聞きとは、ウルトラマンってお行儀が悪いのね」

その場は動かず、ただゼロを見つめた。その目は、何もかも見透かしたよな目で・・

ゼロ「違えよ！お前がいつまで経っても帰つてこないから、様子を見に来て・・そしたら偶然・・」

光「あつそ」

興味なさそうに返事をし、また足をブラブラさせ、空を見上げた。ゼロは光の隣に腰を下ろした。

光「・・・ちょっと、何隣にちやつかり座つてんのよ・・」

ゼロ「うるせえ、俺も暇な時にここに来て、ここに座つて空を見てんだよ」

光「・・・好きにすれば・・もつ

ゼロ「そりゃ言われなくてもそりある

何か言われたら言い返す一人。ある意味、セブンの言うとおり似

た者同士のかもしけない」の一人は。

ゼロ「・・・お前、やつ」

光「どうせ歌のことでしょう」

「言いたいことをさりげなく言われ少しムツとしたゼロだが、黙つて光の話を聞いた。

光「いいわよ、聞かせてあげる。私のすべてを」

光は自分の過去と歌のこととをあざ笑つかのように淡々と話した。

光「私の両親は私が五歳の時、亡くなつたわ。その後、私は親戚の家をたらい回しにされたわ。まあ、当然ね。財産がなかつたら、別に私を育てる義理なんてないんだもの、当たり前よね？私はマスクミからいいネタされた。悲劇の少女！五歳にて両親失う！とかなんだ言って・・の人たちも何にも分かつてない・・・うんざりよ・・・私があなたたちに何したって言うのよ・・・」

光の拳にギュウと力が入る。その手がわずかに震えていることにゼロは気がつく。

ゼロ「おい・・ひか・・

光「私はその時から人を信じるのをやめた。信じたって裏切られるだけだから！私はいつも一人。友達はリリーだけでいい。それ以上、何もいらない・・！」

そう、私の時はあの時から止まつたんだ・・・

どんどんと光の声が荒々しくなっていく。

光「そうよ、あのペンドントも誰から貰つたか知らない！この歌も誰か教えてもらつたのかさえ覚えてない！－！ママはいつもこの歌を歌うと褒めてくれたけど、でも・・でも・・！その時、いつも・！」

悲しい顔だった

ママだけじゃない、パパもだ

どうして、あんな悲しそうな顔をしたのだ？・・・どうして、・？

そんな時、

ゼロ「もういい…やめや…！」

ゼロはもう言わなくともいいと言わんばかりに怒鳴り声で光を止める。

光「あら？ なんで…？ あなたが知りたいって思つたんでしょ。  
…？」

そう言つと光はその場から立ち上がり中へと戻つていった。そんな光をゼロは呼び止める。

ゼロ「おい！ 光…！」

光「…・・・何よ・・」

ゼロ「俺は決めたぜえ…・・・絶対お前を俺の仲間にしてみせる  
…！」

そう言いゼロは、ビシリツと人差し指で光を指す。

光「・・・・。言つたはずよ、私の友達はリリーだけでいい。  
それ以上、何もいらないってね・・！」

ゼロに冷たく言い放ち、その場を去る光。光の肩に乗るリリーだけが心配そうに光を見る。

そり・・・！私には仲間なんて必要ない・・・！

ゼロは去る光の後ろ姿を見る。だが、その目は諦めてはいなかつた。

見てろよ・・光！！俺は絶対諦めねえ！－！

## ゼロの友達大作戦！

チュンチュン・・

光「んっ・・ニニは・・」

窓から漏れる太陽の温もり、青い空に羽ばたく雀たち、いつものベット。

光「フー・・・よかつた・・」

・・・・いつもの日常だ・・やつた・・・夢だつたんだ、あれは…!

私は平和な日常生活を密かに噛みしめる。よかつた、そうよね、あんな非科学的なものが存在するわけないわよね？

こつものように着替えて朝食を食べ、外に出かける準備をした。今日は確か野菜が10%割引だったはず。

光「さてと・・・いってきまーす・・」

ガチャリとドアを開けた瞬間だつた。

ゼロ「よひ、よく眠れたか？」

バンツツツツツツ！－！－！

ドアを開けた時待ち受けていたのは巨大な顔。私は迷わず、すぐドアを閉めたわ。そうね、1秒の出来事だつたかもね。

光「そうだつ・・！確か昨日・・」

昨日、光はウルトラマンエースからこれから住む場所の話を聞かされた。

ヒース『今日からここが君の部屋だ』

その話によるところこの部屋は異空間ゲートと言つものを使って、地球にある私の家の中と繋げているらしい。だが、さすがのウルトラ

マンの技術でも地球全体と繋げるのは無理といつことで悪魔で私の家の中だけ。つまり、外には出れない。

光「しまったー・・・！忘れてたつ・・・！！」

「れじやちょっと恥ずかしいじゃない。ちの自分が……」  
「わいつ思ひで因んでこむと……。

バンバン！！

ゼロ「おこー！」露井かわー！」

煩いのがまだいたわ・・・お前は闇金かつつーのーー

あまりに五月蠅いので私は思いつ毛リゾートを開き、怒りをゼロにぶつけた。

光「うるさーいッッ！！近所迷惑よ！！！！！」

ゼロ」「！」に近所なんかねえよーーー！」

もう傍から見るとどつかのお笑いコンビにしか見えない二人であった・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゼロ「・・・・・・・・」

光「・・・・・・・・」

ウルティメイトフォースゼロ「・・・・・・（汗）」

さつきから二人は厳しい顔して一向に口を開けない。朝から何かあつたようだが、ここまで火花を散らされるとこちらまで気まずくなる。

ミラーナイト「ど、どうしたんですか・・?」一人共、そんな怖い顔をされて・・

ここは恩恵派のミラーナイトが優しく声を掛けるが、呆気なく光の言葉でやられる。

光「つるせい、詭弁野郎」

しくしくしく……。一人建物の端っこで体育座りになつて落ち込むミリヤーナイト。

ジャンボット「こいつっ……なんじことを書つんだー！」

グレンファイヤー「そうだ、いい加減にしろ」

さすがの一人も黙つてられなくなつたのか光を叱る。だが、全然反省の一つも見せない。

光「黙れ、焼き鳥」

ジャンボット「ぐはつー！」

グサツ！

光「あんたもさ……暑苦しい」

グレンファイヤー「がはつー！」

グサグサツ！！

胸に何かが刺さるものを感じる。あの年頃の女の子に言われるれ  
せいか、とても心が痛い。

ジャンボット（（（（これば・・・））

グレンフヤイヤー（（ゼロよつヰハ）わいかもしけない・・・・・）

（

胸を抑え、光を恐ろしくてうつむいていた田で見るジャンボットとグ  
レンフヤイヤー。

グレンフヤイヤー「おこおこ、ゼロ・・・大丈夫なのかよ、あ  
れ・・」

ひそひそと耳打ちで話しかけるグレンフヤイヤー。

ジャンボット「だいたい、お前がこの話を持ち出してきたんだそ  
・・・」

それは昨日のことである。ゼロは外から戻つて来たか思えば、突然

ゼロ『俺はあいつを仲間にするーお前ら、協力しりー。』

と言に出したのである。その作戦名は「友達大作戦」。なんともピンとこない作戦名だ。ついでにこの作戦名を考えたのはミラーナイトである。みんな最初は突っ込もうと思ったけど、あまりの純粋な田舎子供のようだつですか！？どうですかあ！ーと聞いてきたので、ゼロたちは何も言えなくなってしまったのである。

だが、今はじ覽のとおり。壊滅的な状態だ。

ミラーナイト「しゃしゃしゃしゃ…そうですか、詭弁ですか・  
・私は・」

グレンファイヤー「あー！もう、いい加減立ち直れよーーー！」  
ーナイトー

ジャンボット「どうあるんだーーゼロー。」

ゼロ「うーん……」

ゼロがここまで友達関係で悩んだのは初めてだ。ウルティメイトフォースゼロたちが唸り声を上げていると、突然後ろにいた光が何

かを思い出したかのように大声を上げた。

光「あああああ！－！」

ウルティメイトフォースゼロ「「「「ビクッ！！」」

光「しまつた…っ！」**小物袋**、あの森に置いたままだった！

!

ついつい忘れてた・・・と呟く光。困っている光の様子を見てこだつ！と言わんばかりにグレンフヤイヤーが手を上げる。

グレンフヤイヤー「それはゼロに任せた方がいい！」

ゼロ「はあ！？」

光「えええええ？」

めっちゃ嫌そうに顔を顰める光。

ミリーナイト）（も、物凄い嫌そうな顔をされてますね・・）

ジャンボット（（仕方ないだろ・・これしか方法はない））

光とゼロに聞こえないよ「う」。そりと話すジャンボットたち。

ジャンボット「そうだな、光が一人でここを彷徨くと危ないしな・・なあ？」

ミラーナイト「そ、そうですね・・ゼロなら安心して光さんを預けれますし・・」

グレンファイヤー「とにかく後は頼んだぞ、ゼロー！」

ゼロ「お、おこーお前らーー！」

必死に呼び止めたがその前に空に逃げるグレンファイヤーたち。

やられた・・・。

これからどうするものと思つていたら、光からとんでもない言葉  
が出た。

光「チツ・・・仕方ない・・・行くわよー！」

・・・え？今なんて言った？」「こつ・・・

光「何見てんのよ早く行・く・わ・よ！」

取り合えず、光の買い物袋探しに行くことになつたゼロ。目標に一步近づいたような近づいてないような？やり取りだつた。

## ゼロの友達大作戦！（後書き）

ご感想いつでもお待ちしております  
ついでにご感想をくれた人たちもどうもありがとうございました^\_^\n

記憶の中で・・・

光「あつーあつた」

ゼロの手に乗っけてもらい約10分。案外簡単に探し物は見つかった。

光「よかつた・・。まだ中身は痛んでなさそう・・・」

ゼロ「よし、じゃあ帰るぞ」

光「ええ・・・」

行きと同じようにゼロの手のひらに乗せてもらいつ光。空にいる間、光はゼロにある疑問があった。

光「ねえ、あんたたちってさ・・・・・」

ナンデ、コンナワタシニカマウノ・・・・?

イヤナコトタクサンイツタノー?

そう・・今までたいていの人私はから離れていった。ひどい言葉、ひどい性格

人に裏切られたくなくて必死に人を拒絶した私

財産目当ての人やみんなに優しいと思われたくて私を利用する奴

嫌い・・嫌い！嫌い！！全部大っ嫌い！！！

ゼロ「・・・・？」

光「やっぱ・・・何でもない」

任務で仕方なくお前といふって言われたら？

どうじょひへどうじょひう？

嫌だ もう傷つきたくない やっぱり私は一人の方が向いてる

光は不安な気持ちでいっぱいになつた。そんな時、突然目の前に落雷が降ってきた。

ゼロ「うわあー？」

光「やや…」

辺りの空をよく見ると灰色の鉛色の大きな雲が光の国に迫ってきました。

ゼロ「なんだー？あの雲はー！」

光「なんだって…ただの雷雲じゃないの？」

ゼロ「違う…あの黒くて禍々しいオーラは…！」

光「つ！」

またあの時と同じ頭痛がする。

なんで…こんな時に…！

そう思いながらも映像がまた流れます。

ザザツ…ザー…！

あれと同じ黒い雲。ある国へ落雷が落ち、あつといつ間に国は火

の海なつていた。

人々の悲鳴、叫び声。そんな中落ち着いて民衆に指示する者がいた。

？？？『落ち着いてください！みなさん！私の指示に従って動いてください！』

ああ・・またあの女の子

少女が大声を出すも、民衆たちは恐怖に怯え聞く耳など持たなかつた。

その結果、建物が崩れ、下敷きになり死んで人々

炎に身を焼かれ焼け死ぬ人

落雷に撃たれ、灰の様に体が脆くなり、焦げ死んでいる人

どんどんと民衆たちは死んでいく・・・

？？？『お願い・・みんな・・私の話を聞いてええ・・・！』

その場にガクリと足が崩れる少女　その少女の瞳から止めどなく涙が零れる

無力だ・・・私の力は無力だ・・・！

そんな思いがあの子を襲う。

黒い雲から影が降ってきた。邪悪なものを纏いながら少女に近づいていく。

イケナイ・・・！二ゲナイト・・・！

少女はなんとか立って、城の中へと逃げる。だが、影も追つてくれる。

嫌・・・！嫌ああ！！

意識を持つていかれそつゝなる。そんな時、

ゼロ「しつかりしろー光ー！」

光「・・・はあ・・・はあ・・・！」

戻った・・・。何なんだらう、あの映像は・・まるで自分があの子になつていいようだつた。

ゼロ「取り合えず、戻るぞー！」

ゼロたちは急いで、光の国に向かつた・・・。

## 覚醒 光と闇の姫

ゼロたちは急いで光の国に向かい、ミラーナイトたちと合流した。光の国は落ちた落雷によつて崩れている建物が多数と負傷者で溢れかえつていた。

ゼロ「一体何があつたんだ!?」

ジャンボット「ゼロ・・・」

ミラーナイト「よかつた!無事だつたんですねー!」

ジャンボットは脇腹辺りが負傷しており、ミラーナイトはそのジャンボットにバリアを張り、落雷が当たらないよう防いでいた。

ジャンボット「くつ・・・」

ゼロ「大丈夫か!?」

光を手から降ろし、ジャンボットの様子を見に行くゼロ。でも、光は何故かその様子を不思議そうに見る光。ミラーナイトはその光の様子が気になつて、声を光に掛けてみた。

ミラーナイト「何を不思議そつに見ているんですか?光さん」

光「・・・・」

光は黙つてゼロたちを指す。その指された先の光景はただゼロが仲間を心配している。まあ、普通の光景だ。

〃ラーナイト「ゼロたちが何か変ですか？」

光「ねえ・・? なんで他人のこと心配すんの?」

へつ・・?

突然の質問に解答に困る〃ラーナイト。

光「自分が怪我したわけじゃないじゃない。別に心配なんかする必要なんかないじゃない」

そう・・赤の他人なんか心配する必要なんかない・・。

小さい時、私が親戚のどこの誰で怪我をすると心配されるどこの誰か、

『なんで厄介』と起こすのかねえ・・・何?私たちへの嫌が

らせ・・?』

その時私は、思った。別に他人のことで心配なんかする必要なんかなことを、他人には無関心でいる方が良いということを。都合のいい時だけ助けて、都合の悪い時なんかは、すぐに見捨てるじゃない・・そう、人間なんかはただその程度の生き物・・。きっと、ウルトラマンたちにもいるに決まっている。

「 そうよ、別に一銭の得にもならないじゃない。人助けなんか・・。  
なのに、なんであいのは・・・・・・

ターンヲシンバイスル・・? 何故・・? 何故?

光「分からぬわ・・私には絶対・・・!」

ミラーナイト「・・・・・・」

ミラーナイトを含むウルティメイトフォースゼロたちは、ゼロから光の過去の話を聞いた。まだきつと全部ではないが大体の事情、光が何故あんなひん曲がった性格になってしまったかがわかった。多分、嫌でも殆どはそうなるであろう、あんな扱いを受けては・・。自分もゼロに助けて貰わなければ。闇の力を言い訳にしてずっと戦いから逃げてただろう。大切なはずの姫からも目を背けて、自分の醜い姿を誰にも見られないように、自分だけの為にきっと逃げ

続けた。だから、光の話を聞いて思った。

「そうか……ただこの子は……」

人に優しくすることをまだ知らないだけなんですね……

この力を大切なものを守るために使おう。この気持ちを思い出させてくれたゼロには本当に感謝している。//ラーナイトはだから、優しく光に教えてあげた。

//ラーナイト「仲間なんですから、心配するのは当然ですよ……。きつどゼロは私やグレンファイヤーが倒れた時にも心配してくれますよ。もちろん……貴方の時にもねえ……？」

光「……フンッ！私はまだ仲間なんかじゃないし、これからもならない」

大丈夫……ゆっくりと話し合えば、この人は……。

もう//ラーナイトが思っている時、光の上に一つ落雷が落ちる。

光「つー？」

〃ミラーナイト（（しまつた・・つーーー））

バリアじや間に合わない・・・！

そんな中、ついに落雷が光のところに落ちた。光が恐る恐る田を開けると田の前には、庇うように背中を光に向けていたミラーナイトの姿があった。嫌な焦げた匂いがミラーナイトからする。もしかするとと思い、ミラーナイトの体をよく見ると右肩に大火傷を負っていた。

ゼロ「ー〃ミラーナイトッ！ー」

光「なつ・・・！あんた馬鹿じやないつ！？・・・何？それで恩でもつくつたつもりーー！」

その声には戸惑いと焦った様な様子が感じ取れる。

〃ミラーナイト「違いますよ・・・私の力はいついつ時のためにある力ですから」

光「それはこういう風に人を守るために怪我をする力のことかよッーー！」

ミラーナイト「違います・・・大切なものを守るための力です・・・」

光「・・！」

光は眉を顰める。光にはまだ分からぬのだ、何故他人のために本気にならなければならぬのかが。

グレンファイヤー「ぐあー！」

「どんっ！」と音を立て、空から地面へ突き落させたグレンファイヤー。体中がボロボロだが、なんとかグレンファイヤーは上半身を起き上げさせる。

グレンファイヤー「痛え～・・・！」

ゼロ「グレンファイヤー……！」

傍に近寄り、グレンファイヤーに聞いた。

「…？」口をぱくぱく開けたまま、アリスは呆然と見つめている。

グレンファイヤーは黙つて空に浮かんでいる黒い雲を指した。

ゼロ「あの雲・・?」「

グレンファイヤー「ああ・・・。しかも、ただの雲じゃない。何か邪悪なオーラで周囲にバリアを張つてやがる・・・！」

どうやら体中にある傷はバリアに何回も突っ込んで出来たものであるらしい。ゼロが空の雲を睨んでいると黒い雲から聞いたことがある声が降ってきた。

ベリアル「よつ・・ゼロッ！また会ったな！！」

ねつとうとし、まるで悪魔のよつかの声が黒い空に響く。

ゼロ「お前はっ・・・！カイザー・ベリアル！！」

グレンファイヤー「まだ生きてたのか・・・！」

三九一ナイト「そんなり・・・」

ジャンボット「くそつ！姿を見せろ！！」

沈黙の光の国の中、四人の声がよく響く。黒い空からついに姿を出す、ベリアル。

ベリアル「くつくつ・・・良い様だなあ！ ウルティメイト  
オースゼロ！！」

光の国、史上最悪の元ウルトラマン。力を求めすぎて、光の国を追放された悪魔がゼロに復讐ベガサスを誓い、蘇り帰ってきたのだ。

ベリアル「ぎやはやははーーお前らに今ここでこの前の借りを返したいところだが、今日の目的はそれじゃない・・。俺の前へ姿を現せ！ 天馬の鍵！！」

ピカツ——！

光「さやああーーーな、なんなのーー？」

ペンドントから今までにない禍々しい色の闇を発し光の体に纏わりつく。光が宙に浮き、勝手にベリアルの元へ導かれる遊な感じで引き寄せられる。ベリアルは乱暴に手の中に入れ、グツと握り潰すよつの感じに持つ。

光「うつ・・・ああ・・ツー！」

ゼロ「光！…ベリアル…ツ…てめ…つ！」

光を助けにベリアルのところに突っ込むがバリアで跳ね返され、光に近づくことさえできない。

ゼロ「くそつ！」

リリー「キイー！」

傍にいたリリーが威嚇の声を上げ、ベリアルの手に噛みつくがまつたくもって効果がなかつた。

ベリアル「邪魔だあ！」

リリー「キュウー！…」

光「リリーッ！…！」

軽く振り払はれて、地面に落ちていくリリー。光は必死に片手を伸ばすが届かなかつた。

光（（そんなつ・・・…））

リリーが・・リリーが・・・…だが、そんなことを思つてゐる暇などなかつた。

ベリアル「やつと捕まえたぞお・・・・！天馬の鍵！！」  
ベガサス

光「あ、あなたはあの時の・・・？」

そうだ、間違いない！あの時私を捕まえようとした時の声と同じだ。

ベリアル「覚えてたか・・・だがもう遅い！全ては俺様の手に揃つた！！さあ、目覚めろ！－漆黒の姫！」  
プリンセス

光「いやあああああ－！－！」

光の悲鳴とも合図に光が黒い球体に吸い込まれる。パリパリと私の中の何かが壊れ始める。

そして、ついに

パリンツッ！－！

ゼロ「光ッ！－くそ・・・開きやがれ－！」

ベリアルのバリアをガンガンと叩くが、傷の一つも付かない。

くわつー・・・くわおおーーーー！

黒い球体から突如、闇の衣のようなドレスをし、漆黒の髪をした少女が繭を破るようにして出てきた。瞳が開くと、まるで人の血のように鮮明な綺麗な紅色な瞳がウルトラマンたちを捉える。

〃ラーナイト「ひ、光さん・・?」

ジャンボット「いや・・、様子が変だぞ・・?」

光の髪の色はこげ茶色だつたはずだ。あんな真っ黒な髪の色ではなかつた。服装も大分変つてゐる。

ダーク「わが名はプリンセス・ダーク！」ペガサス天馬の鍵の破壊の意志ッ！

カツと田を開き、その場の空氣を威圧する。その場にいた者たちは光の体の中にいる何かの存在感を感じ取つた。まるでデカレードラゴンがこいつらを田の前で睨んでいるかのような錯覚を『』える。

ジャンボット（（な、なんだ・・・？）この威圧感は・・・）

グレンファイヤー（（今にも押しつぶされそだぜ・・・））

ダーク「貴様か・・鎖を壊し、闇を私に与え、出したのは・・」  
リミッター

ベリアル「そうだーさあ、檻から出してやつたー印を俺様によ  
こせー！」

ベリアルはダーク何かを欲している。印つて一体なんのことだ！？

ゼロ「おいーしつかりしきつーー光ツーどうしちまつたんだ！」

?

ダーク「煩い……！ 気安く話しかけるなあ！」「

黒い波動の衝撃波がベリアルとゼロを襲う。

ベリアル「なつ・・・! ? ぐはつ・・・!」

ゼロ「べあッ！！」

吹き飛ばされたゼロたちを見て、ダークは嘲笑うかのように下から見下ろす。

ダーク「下等生物」ときが・・・」

ゆつくりとベリアルの傍へ近づき、小さな体で軽々とベリアルの胸ぐらを宙へと掴みあげるダーク。

/// ラーナイト（ベリアルをあんなにあつせりと・・・）

ベリアルは目の前にいるダークを睨みつけ、言葉を吐き捨てる。

ベリアル「このくそがつ・・・！」

ダーク「ほう・・・大概の奴はこれで怯えて、私に殺されていつたのがな・・。面白い、いいだろう。一億年ぶりにお前に印を授けよう・・ただし・・・」

手のひらに雷のようにバチバチという闇のエネルギーがダークの手に見える。

ダーク「最高級の痛みと共になあーー！」

そう言い、ベリアルの胸にそれを押し付ける。さうあるべリアルの苦しそうな悲鳴が響く。

少女の笑みは残酷に刻まれ、まるでベリアルの苦痛を餌にしてる  
かのように。

ダーク「はい・・印の転送完了だ」

ベリアル「はあ・・・！はあ・・・つ！印が手に入つたぞ・・！」

ベリーアルは壊れたおもちゃのように笑つた。ダークは永い眠りからようやく解放されて、クスクスと笑う。

突如、苦しみ、その場に蹲るダーク。  
（ハズクマ）

グレンファイヤー「なんだ、なんだ？今度は何が起つたんだ

！？」

さつきまで笑っていたダークの様子が変だ。フルブルと小刻みに震え始めた。そうすると今度は一人でぶつぶつと呟き始めた。

ダーク「な、何故、貴様がここに……！」

ライト『私と貴方は光と影の様な存在です。あなたが出てくれば私も封じられていた力が出てこれる！』あ、中へとお戻りなさい！－－－－－

ダーク「く、くぞつ・・おのれ、ライドッ・・め！－－あああああ！」

ああ－－－

頭を抑え、悲鳴を上げるダーク。先ほどにはない明るく優しい光が光の体を包む。そして、今度中から出てきたのは、さつきと真逆な真っ白な髪と光の衣を被り、海のように深い青色の瞳がウルトラマンたちを見つめる。そして、ベリアルの前と立ちはだかる。

ベリアル「貴様・・何のつもりだ・・？」

ライト『私はもう一つの天馬の鍵の意志－平和を望む者です！』

「！」

ベリアル「純白の姫の方か……！」

ゼロ（（純白の姫<sup>プリンセス</sup>・・・？））

ベリアルの笑みは一変し、苦虫を噛み潰したような表情を見せる。

「ライト」このくの攻撃は私が認めません。悪いことは言いません・・天馬のことは忘れ、この星から今すぐ去りなさい」

「ベリアル」「うるせえ！俺様に指図するなあ！－また俺がお前たちのほう・・」

「ライト」「つ！－・・・残念ですがあなたにはここから強制的に排除させていただきますつ！」

両手に光のパワーを集め、ベリアルにぶつける。光と共にベリアルの悲鳴が聞こえたが、すぐにそれは止んだ。それはそのはずだ・・、何故なら本当にベリアルは消えていた。

「ライト」・・・・・

黒く覆っていた雲が晴れ、優しい光が漏れだす。まるで、時が動き出したかのように他のウルトラマンたちの声が聞こえ始めた。エースたちが「ひらり」とよつやく応援にきた。

ゼブン「ゼロー」

ゼロ「オヤジー遅えよんだよーーー！」

セブン「ダークロブスに手間取ってしまったな。。んつ？あの子は・・ー？」

ヒース・メビウス・キング「「「・・・ーーー」」

ライトの姿を見て身構える。ライトはそつとゼロたちの目の前へ近寄り、ドレスのスカート部分をちよつぴり持ちながら、ペニワとお辞儀する。

「ライト」「初めまして、私は天馬<sup>ベガサス</sup>の鍵の意志の一つのプリンセス・ライトといます。昔は、天馬族という種族の国で出来ていた国姫をしておりました・・・」

ジャンボット・ミリーナイト・グレンファイヤー「「「えええ

えーーー?」「」

ゼロ（（ひ、光がお姫様！？））



覚醒 光と闇の姫（後書き）

あああああ！――ベリアルの喋り方があんまりよくわからない――！――なんか変だつたら、めんなさい、へへ――！――！

## 天馬の悲劇（前書き）

光と闇・・・それは無を現すもの

光が消えれば、闇だけが残る静寂の世界　闇が消えれば、光だけが  
残る禁断の世界

一つは自分が生き残るために他方を殺そうとする

どちらかが消えれば、自分も存在できないはずなのに・・・

そう　一つの存在は　とても矛盾している

矛盾シテイルハズナノニ・・・

決して離れはしないし、離れもできない

重なることのない世界と狭間そして、境目

光と影 白と黒 理想と現実 天使と悪魔 愛と裏切り 喜びと嘆  
き・・・・・

全部・・全部つ！ 」の世界は矛盾している

一体誰と誰がこんな化け物モノを生み出したのである？・・？

いつ ビニで なんのために・・・・？

もし、これが神様が作った物語なら私は間違いなく神様を恨んで  
だろう・・・

私ガ、イツドコデアンターナーヲシタ？

ナンド コンナカナシイオモイヲシナケレバナラナイ？

悲しみは一億経つても10年経つても癒されない・・・

一億年前・・・？

なんだろう そんな前になんか存在してるはずがないのに なん  
でだろう この感情

とても とても 悲しい・・・

知らないのに知っている 知つてはいるはずがないのに知つてし  
まつている

胸が痛い・・・ どうして・・?

ドウシテ コンナニ イタイノダロウ・・・?

## 天馬の悲劇

ゼロ「お前は一体誰なんだ・・・？」

ゼロには感じる。ライトは抑えているつもりだが、中に凄まじいほどの力が眠っている。これならダークという奴とも互角に戦えるであろう。

「ライト」いいでしょ？・・・お話します。でも、始めは私の正体ではなく、もひとつ昔・・・そう、一億千年前の話

グレンファイヤー「い、一億千年前・・・？マジかよ・・・」

ライトは関係のないウルトラマンたちに聞こえないよう周りにバリアに近い膜のようなものを張った。そして、ライトは悲しそうに話し始めた・・・天馬族が出来た真の事実を・・・

「ライト、私たちの先祖はかつてレイブレット星人といつ種族にとても近い存在の力の持ち主でした」

「ランナイト、レ、レイブレット星人ですか……？」

ゼロ「なんだ？ そのレイブレットって……」

「ランナイト、わ、私もあまり詳しく知りませんがこの前、古い本を調べていたら載っていたんです！ レイブレット星人とは、幾つもの星を破壊するほど恐ろしいパワーを持つていると……」

「ランナイトの話にゆづくつと頷くライト。

「ライト、そうです……。レイブレット星人はただ破壊と殺戮と支配を楽しむ、恐ろしいものたちでした」

「しゃつと眉を顰めるライト。どうやら、かなりひどいものだつたらし……。

ライト「だけど、私たちの先祖は違いました。決して無意味なものなどは破壊せず、ただ平穏に生きていました。・・だけど、そこにある悲劇が起きました・・」

キング「その悲劇とは・・?」

ライト「はい・・。私たち、種族の先祖たちは群れで生きるものたちでした・・。そこに突如、巨大な彗星がぶつかり、ある一つの天馬が逸れて、ある星に墜落しました。それが私たちの先祖になり、そして私たちが暮らす星となつたのです」

トース「・・・」

ジャンボット「だが、それがなんで悲劇なんだ?・どうちかと言つと自分たちが生まれることが出来たのはそのおかげだらう?」

ライト「そうですね・・でも」

ライトは口では笑つてゐるが、瞳はとても悲しそうに歪ませる。

ライト「大いなる力があれば必ず、大いなる悲しみも呼んでしまつのですよ・・」

ゼロ「……」

ライトは瞳を地面に伏せながら、話す。

ライト「ヤシの星にはもう人間と同じ生き物が住んでいたのですよ。戦争もしていたし、各国で争い」ともありました。。。そんな中、天馬の噂はすぐに広まりました・・・ゼロ、あなたはあの歌を聞きましたよね？」

ゼロ「ま、まさか!?あの歌は・・ツ!」

ライト「ヤシ・・本当にあった話を元にして出来た、悲劇の歌です」

ライトは歌を知らないウルトラマンやもつ一度ゼロに聞かせるため天馬の悲劇を唄つた。

迷子の一匹の天馬が 泉で羽を休ませた

泉にいつも移るのは 空を駆ける星々たち

天馬が通れば、地が潤い、湖は清らかに、草木は恵まれん

天馬は孤高の騎士 いつも一匹 いつも孤独 いつも仲間を探した

だが、

誰もが天馬を欲し 命を狙い 傷つけた

怒り狂つた天馬は 復讐を誓い いくつもの国を滅ぼした

天馬が地を駆ければ 地は崩れ、国の王たちは死んでいく

天馬が空に羽ばたけば 風が荒れ狂つた

天馬が人を呪えば 人々が死んでいった

人々は許しを請うが 天馬は人々を苦しめ続けた

羽は黒く、霞み 穢れ 天に戾れぬと 天馬は嘆いた

赤き瞳から 血を流し、植物は 悲しみに枯れていった・・

天馬は 国を作り 傷を癒さんと 眠りについた そして 封印された

国の 囚われ姫プリンセス

白木蓮はくもくれんのドレス着て 今日も嘆き、唄う

決して目覚めらせてはならぬと… 哀れな天馬を

次 扇開くとき 運命は死に 王の印 目覚めん

ライト「この歌は私たち王族のものだけが知る歌です・・」

ゼロ「なんでだ・・・逃げることもできただろーなんでわざわざいりや・・・」

確かに天馬を利用した奴らも悪いが、さすがにやりすぎだと思つ。つい、ゼロも声を荒上げる。

ライト「無理ですよ・・・、ゼロ」

ゼロ「なっ・・・!?

///ライト「なんですか!・・・」

ライト「だつて私たちの先祖は・・機械生命体だつたんでもの」

メビウス「えつ!・・・」

セブン「何・・・!?

キング「本当なのか・・・それは・・・」

「どうやらオヤジたちは機械生命体がどうこうのものなのかを知つて  
こなりしこ。

ゼロ「オヤジ、機械生命体って・・・？」

セブン「・・・機械生命体とは、体は機械そのものだが、感情や  
知性は人間と・・・いや、人間以上のものを持ち、そして生命力も  
とても強いとされてる、でもどうやら人間の言葉は喋れなく、石  
や宝石などの姿や性質が似ているらしい。だが、実際には  
思つていなかつた・・・架空のものと本には記されていたからな」

ライト「残念ながら、すでにじつこの時代には機械生命体は滅  
んでいます」

そのライトの一言にグレンファイヤーは疑問を持つ。

グレンファイヤー「待つてよ・・・なんで滅んじまつたんだよ  
？機械生命体には、強い生命力があつたんだろう？」

「ライト」「確かに強い生命力はありますが、無敵なわけではありません。傷つけば、弱り、死にますし、お互に戦い合って、滅んでしまった機械生命体たちも数多くあります・・・」

「」「ライナイト」「なんだか・・とても悲しいですね。同じものなのに争つてどちらも滅んでしまつなんて・・・」

「ライト」「はい・・まったくもつてその通りです。でも、機械生命体じゃなくてもあつてもきっと変わらなかつたと思います・・。多分、天馬を利用しようとしたものたち、あるいは利用した奴らは気付かなかつたんでしょう・・。その石に意志があつたといふことを・・。そして、他の機械生命体も・・人間も・・ちょっとした違いも認められず、傷つけてしまうものや力を求めてしまつものがいれば、ずっとこの過ちは繰り返されてしまいます・・」

そんな話の中、また新たな疑問がライトに来る。

「ジャンボット」「じゃあ、昔の君は機械だったのか?」

機械で出来てゐるジャンボットがこんな質問をするのも何か少し違和感を感じるが、ジャンボットの目は真剣なので黙つておこう。

「ライト」「いいえ、昔の私はちゃんと人間ですよ～。そうですね…。  
その話もちゃんとした方が良さそうですね」

そして話はまたあの話に戻る。

「ライト」「歌の通り、天馬は力を使い果たし、そして自分の力を恐れ眠りへとつきました。その時、天馬は自分を二度と目覚めさせないようそこに番人の役目として私たち、人の形をした人型人工機械生命体ができ、そして三つの鍵と印を持つ者にしか姿を見せない扉を作ったのです」

ゼロ「その印ってまさか…」

「ライト」「先ほどジダークがベリアルに渡してしまったものです…」

」

ゼロたち  
（（（（（なつ・・・）））））

グレンファイヤー「お、おい！それってかなりヤバいんじゃないのか！？」

「ライト」「はい…。今、印を持っているのはベリアルだけです…。

・。印を持つていなかぎり、決して扉は姿を現しません。悔しいですが、今のところ印を持つているのはベリアルだけです」

リーラーナイト「そんな・・・」

ズーくんと一緒に重い空気になり、ライトが必死になつてこうむナ加える。

ライト「ちよつ！みんなん・・・！そ、そんなに落ち込まないでください、実はまだ印は作ることができるんです」

ゼロ「ほ、本当か！？」

ガツと顔を上げ、ライトに詰め寄る。ライトは元気よく「はいへへ！」と頷いた。エースたちは安堵を付き、グレンファイヤーは炎の頭を癖なのか上と撫で上げる。

グレンファイヤー「たくっ・・・そつなら先に言えよ。まあ、俺はそうだと思ったがな！」

ジャンボット「嘘つけっ！そんな風にはまつたく見えなかつたぞー！」

グレンファイヤー「いやこちつむせえなー焼き鳥……」

ジャンボット「だ・か・ら、ジャンボットだと言ひてゐだらう  
この馬鹿がツー！」

キーキー言つ「入にはもう慣れてきた。でも、ライトが非常に言  
いにくやつにいつも続けた。

ライト「でも、印はもともと一つしかないものなので、私が悪  
魔で用意するのは合鍵のようなものですので、一人にしか託すこと  
ができないんです。すみません、今の私の力では印は一つを作るで  
精一杯なんです・・・」

ウルティメイトフォースゼロ「「「えつ・・・?」」」

ウルティメイトフォースゼロは互いに他の者たちを見つめ合つ。  
だが、すぐに答えはでた。

グレンファイヤー「ほりよ」

ゼロ「うわあー？」

グレンファイヤーに背中を押され、みんなより一歩前ぐらへ出

それる。

ゼロ「何じゃがふー。」

ジョンボット「何つてお前が印を剥取るのだらうへ早く済ませて来てー」

ゼロ「えい・・・?」

リーナイト「隠しても無駄ですみ。一番やりたいくて顔をされてしましき、それに私たちのリーダーはゼロだけですから

ゼロ「・・・・・」

ゼロは真剣な表情を見せ、仲間の顔を見る。そして、新たに決意

を改めライトに向き直る。

「・・・アトリ・・・」

ライト「覚悟は決まつてゐるようですね・・・わかりました・・・」

「ー。」

「ライトの手に金色の光が包み込む。それをちょっと優しく、ゼロの手のひらに乗せる。」

「ライト」「ゼロ・・・あなたに光の印を差し上げます・・・」

「ゼロ」「ねいわー・」

ゼロの手に不思議な模様が浮かび上がり、ゼロの手のひらから漏れていた金色の光は不思議な模様と共に徐々に弱まり、消えていく。

「ライト」「印、転送完了です・・・」

「ゼロ」「・・・・・」

不思議そうに自分の右手を見るゼロ。ベリアルは印を受け取ったとき苦しそうにしていたが、今回痛みはまったく感じられなかつた。

「ライト」「ねいわー・」

宙に軽々浮いていた光の体がどんどんと急降下していた。

ゼロ「わおー。」

なんとかライトを手の中にキャッチできたが、また光の体の様子  
がおかしくなつてきている。

ゼロ「えうつたーおこーーー。」

「ライト」はあ・・はあ・・一光・・が目覚めます・・ツーーー。」

「「「ナイト」光さんが！？」

「ライトは苦しい息継ぎの中、ゼロたちに頼み」とした。それは、

ジャンボット「光に」のことを語れないでいてほしい・・？」

「ライト「そうです・・ツ、あの子がこの話を聞けばもしかしたら精神が混乱し、大変なことになつてしまふかもしません・・ツ！…やつ・・やつとあのことも思ひ出してしまつ・・ー。」

ゼロ「あのじと・・？」

「ライト「ツ！・何でもありません。私が最後にこの子に力を  
さ・・すけ・・ます・・後は・・取り合えず、お願ひ・・しま・・  
つ・・！」

ブツリと突然切れたテレビのように何も動かなくなる光の体。回  
りを包み膜が消え、そして、突然と光の体から真っ白な光が漏れだ  
す。

ゼロ「うつ！」

エース「くつ・・！」

ジャンボット「なんだ！？」この光は・・つ！」

ズッシリ・・

突然、手に重たいものを感じる。なんとそこには、さつきまで米  
粒サイズだった光の体が自分たちと同じぐらいの大きさになつてい  
る。

ゼロ「なつ・・！」「は・・」

光「んつ・・！」」「は・・」

パチクリと目を覚ます光。どうやら、いつもの光らしい。姿も格好もいつの間にやら元にも戻っている。

光「なんであんたが・・つて！」

光はすぐ気づいた。この格好もしかして……お姫様抱っこ？

鳥肌が立つ肌を抑えながら、私はゼロにアッパーを決めた。

ゼロ「グハッ！！」

光「つて言うか、なんで私デカくなつてんだあああー！」

## 天馬の悲劇（後書き）

ミラーナイトに混乱している光の鎮静を頼むが、きつと長くは持たないであろう。

ゼロ「あつ！－」

グレンファイヤー「な、なんだよ！－」

ゼロ「しまった・・・あいつの正体まだ聞いてなかつた・・・

ゼロ（（そう言えば、光・・あの歌を知つてたのか・・?））

他のことを考えていて動きが少し止まるが、次のグレンのセリフで我に戻る。

グレンファイヤー「・・・・・何やつてんだお前・・・」

カツチン！－

ゼロ「何だよ！－人のこと言えんのかよ－グレンファイヤーは！」

グレンファイバー「フン…お前みたいに正体聞き忘れる奴みた  
いな奴ではねえよー俺はなーー」

ゼロ「なんだと…てめえーもうこいつへん言つてみるーー」

グレンファイバー「ああー言つてやるーー」

小さい子供みたいに火花を散らすゼロとグレンファイバー。負傷  
を負っているジャンボットだけがその様子を見て、思つ。

ジャンボット（本当にこの先大丈夫なのか？このチーム…）

と今回はジャンボットが頭を抱える。

## 頼りにならない奴

//ラーナイト「光さん・・これ

//ラーナイトの手からリリーがひょこっと顔を見せた。

光「…」

田をキラキラさせて、何も言わずそれを//ラーナイトから受け取る光。自分がデカくなってしまったせいか、もの凄くリリーが小さく見える。

光「あんた一番頼りなやつに見えるナビ、役に立つともやー役に立つのね」

//ラーナイト「あははは・・」

//ラーナイト（（（、「今のは褒められたんでしょうか・・?））

そんなことを疑問に思つ//ラーナイトだが、光はまだ何か不安そうだ。

〃ラーナイト「？？？・・・どうしたんですか？」

光「どうしたもなにも・・・」んなに大きくなちゃって・・これ  
かうどひじりひて言ひのよー。」

「れじや食事や風呂や着替えどじろか、自分の部屋に入ることす  
らできない。光にとつてはなんと「ありがた迷惑な力だつた。

光「もひひーーーどうやつて戻ればいいのよーーー（怒）」

そつ心から思つた時だつた、さつきのように光の体から光りが溢  
れ出た。そして、光の姿がどんどんと縮んでいく。光が止んだ時に  
は〃ラーナイトの視界から光の姿が消えていた。

〃ラーナイト「ひ、光さん！？」

メビウス「どうしたつ！？」

突然の光と〃ラーナイトの慌てふりに近くにメビウスもその場に  
駆けつける。

光「ミリョー・ビージー見たらのよ、レーリーちー・ミラーなんとかとな  
んとか……」

え？ つと思ひ下を見るとまた光は元の大きさの姿に戻っていた。  
あつ、でも私ミラーなんとかじやなくて、ミラー・ナイトなんですが  
れども……。後、隣の人はメビウスですよ……。

ミラー・ナイト「よかつた……ただ元の大きさに戻つただけなん  
ですね？」

メビウス「もしかして……つーライトが最後に言つていた力  
をつて……」のことがだつたんじやないか？」

ミラー・ナイト「えつ……？ あつ……！」

察しが良いミラー・ナイトはメビウスの言いたいことがすぐ分かつ  
た。 そういえば、ライトは何か最後に言つていた。

ライト『私が最後にこの子に力をも……すけ……ます……』

力というのはこのことか・・とすぐ理解した。こうなつたら光にお願いして確かめるしかない。

ミラーナイト「すみません、光さん。さつきとは逆に大きくなりたいと思ってくれませんか?」

光「はあ！？嫌よ！せつかく元に戻れたのになんてそんなこと・つ！」

メビウス「そこをなんとかつ！」

ミラーナイト「お願ひします、光さん！」

光「うう・・！」

さつきミラーナイトにはリリーを助けてくれた（一応自分も）といつ恩がある。気に食わないがそれはれつきとした事実であった。

光「わ、わかったわよ！やりやいいんでしょ！やりやあーー！」

「うなつたらやけくそだと思い、さつきとは逆に大きくなりたいと願う光。そうするとまだ。

光「えつ？えええ！！？」

ミルカイヤエヌピカスが少し高い大きさで、と並んでいた。

光一お、大きくなつてゐるうううううううう！――！――！」

今度は肩に乗つてたリリーも一緒だ。私、同様何故か大きくなつてゐる。だが、そんなことよりも私はミラーナイトに憤慨していた。

光「何すんじゃ！－」このボケツ！－ビアホツツ！－

私はミラーナイトに蹴りを何発も入れる。

ミリーナイト「痛あ！…痛いですよ♪ ^-^! 光さん！…」

光「当たり前じゃー！」の馬鹿タレッ！－本氣で蹴つてんだからーー！」

メビウス ((二、怖つ・・・!-) )

さすがのメビウスもこれは怖い。でも、これではつきりした。多分ライトが光に授けた力とは・・

自分の意志で体の大きさを変えられる力

ここで生きていくには確かにちょっと不便な大きさだったので、丁度いい力だ。これで光が間違つても踏みつぶされるという心配はなくなりた。

メビウス（（それにしても・・））

ミラーナイト「ちょっと・・・ひ、光をふー?い、石は本当にマズいですって・・!（汗）」

両手に大きな石を持ち、それを目の前にいるミラーナイトに投げ飛ばそうとしている光の姿がある。

光「大丈夫よ・・地球には鏡を治す職人さんがいっぱい居たし・・ここで壊れてもきっと誰かにすぐに直して貰えるはずよ・・?」

「ガガガガオオ・・と黒いオーラとキラリと光る野獣のような目。ニッコリと今までにない笑顔だが、何故かその天使のような笑みが逆に怖い。

うん、きっと睨むだけであれば人を殺れる目だ。

メビウスもあんなに怯えている//ライナイトは初めて見たぐらいだ。

メビウス（ち、地球の女性つてこんなに怖かつたけ？・・・  
（汗））

あれなうきつとほゞんどの怪獣は腰を抜かすか、逃げ帰るであるう。

//ライナイト「ちよつ！…あの・・つ！…あああああツツ！  
！…？・・・・・」

ミラーナイトは、その後の記憶がないと遠い田舎で語ったのでした。  
チャンチャン

## 頼りにならない奴（後書き）

なんかすみません。。。光の大きさを説明するにはミラーナイトを  
生贊にするしかなかつたんです。。。！  
あつ、まあへへ次にはちゃんと復活してるんですけども（笑）  
でも、ミラーナイトファンの人本当にめんなさいいー！！

## 懸夢と光の国（前書き）

許さない・・許さない・・つー絶対に許さない・・・！

声が聞こえる・・あなたは誰・・？

憎しみに満ちた声だったが、何故か震えていた そう これは泣いているんだ

様々な声がやわらかく耳障りのよう聞こえた

殺してやる 裏切った 憎い 信じたのに 怒り 苦しい  
悲しい 辛い 痛い 助けて・・

憎悪の言葉が並べられる でも その子は泣いていた

じりじりなのよ・・つ！ 兄様・・・ なんで・・？ なんで  
私を・・つ！

暗闇の中、黒いドレスを着てしゃがんで涙を流してた女の子がは

つきりと何故か見えた

あんたは 一体 誰・・?

声を掛けた そしたら、少女は 振り返り 怒り 怪物の様な醜い声で叫んだ

！！ 見たな・・？ 偽物風情がああ・・つ！ 勝手に私の心を覗くなああ！-！-

強い風がその場に起こり、吹き飛ばされそうになる  
その風に乗り、そして

黒い子は 私に襲いかかってきた

光「はあ～・・」

いつもより深いため息をつく光。今日は、ゼロたちが私が大きくなれたので光の国を案内してくれるといつのだ。まったく・・余計なお世話だつて言つてんのに・・。

グレンファイヤー「どうしたんだ? そんな溜息ついてると幸せが逃げていくぜ」

光「うつせい。そんなことで人の幸せが逃げていくはずないでしょ、バーカ」

グレンファイヤー「チッ・・・可愛くねえのー」

光「あつや」

そうなのだ、私はこの頃変な夢ばつか見ていくよつな気がする。はつきりとはしないが薄らと記憶があるようないような・・?とにかく微妙な感じである。おかげで今まで今日は、寝不足だ。

光（うつたぐ・・・）私は、ゆっくり寝てたいのになにつりは向

考えてんだか（ ）

「う」ればゼロたちの作戦でもあった。これを機に、光との中を縮めよつと。

「ラーナイト（ ）は、光の国といい場所を教えた方が得策でしょ（ ）」

ゼロ（（あー・そうだなー・））

ジヤンボット（（本当に大丈夫なのか・・？））

ラウンドー　光の国の子供のウルトラマンと触れ合おう！

田には田を子供には子供を…こい案だと思つたが、その相手のウルトラマンの子供がかなりの生意気小僧たちだつた。

ウルトラマン　子供A「やーーーー！」まで追いで…（あつ  
かんべーーー）

ウルトラマン　子供B「あーつ、変な格好してるゼー！あははは  
ー！」

ウルトラマン　子供C「本当に…しゃははは…」

光「・・・・・」

光はさすがに子供に手を出すのはマズいと思っていたのか、ぎゅと手に拳を作り体を震えさせていたが、次の言葉で光がキレる。

ウルトラマン 子供A 「あつーあいつ震えてやがるゼーー・ダッセー！（笑）」

ブチッ！

ミラーナイト（（あつー））

ゼロ・ジャンボット・グレンファイヤー（（マ、マズい・・・ツ！ー））

動き出す光の体をゼロとジャンボットとグレンファイヤー三人係で止める。必死でミラーナイトは光を宥める。

ミラーナイト「お、落ち着いてくださいーー光さん！」

ジャンボット「そうだーー旦、落ち着けーー光」

光「何言つてんの？あの子たちが言つたのよ・・・」ここまで  
ついでつて・・だからね、ちょっとあいつら生け捕つてくれるわ・・

おいおいおい！なんか最後に言つてることが怖えぞおー？

やばい、光の田がマジだ・・。まあ、俺もあんなこと言われたら  
キレると思うけど・・。光の怒りのパワーは思いのほか強く、俺た  
ちが三人係で止めてると言うのにすると光の足は止まらない。  
このままでは、地球人がウルトラマンの子供を半殺しにするという  
前代未聞の事件が起こりてしまつ！なんとしてもそれだけは防がな  
くては・・！

ゼロ「止まれって・・・・・」

グレンファイヤー「光！ガキ相手に何マジになつてんだよ！-  
(汗)」

光「煩いわ、今こりで奴らに人生の厳しさといつもの教えて  
やる・・」

ドッカンツツツツ！-!-!

ゼロ「うわああああー！-!-?？」

「ウルトラマン 子供B 「わあ！？何すんだ！いつも僕らに地  
球を守つてもらつて いるクセにーー！」

光「うるせええ！－あんたみたいな奴に守つてもうづぐらいな  
ら、地球が滅びたほうがマシよ！」

「アーマン、予算が一歩わあああん」「……！」

ジャンボット「誰かあいつを止めないとおおーー。」

グレンファイヤー「光様が」乱心じやああああ！？？」

あまりに恐ろしことが起りてこますのでよこ子の読者には教えられないよ

なので、その後の出来事は読者のみなさんの「想像」にお任せします。

ラウンド2  
ウルトラマンの歴史や宇宙について知ろう!ー。

「JJKは光の国ある国立図書館。ミーハーナイトやジャンボットはよ  
くここで宇宙の歴史など難しい勉強をしている。光はさつそく本を  
手に取るが、眉をすぐ顰める。

光「あのう・・私、ウルトラマン語なんてわからないわよ・・?  
」

//ミラーナイト・ジャンボット「・・・あつー?」

しまった・・ナニは、盲點だった。がっくりと//ミラーナイトたちは頃垂れる。

ゼロ「意外とあいつらって・・・」

グレンファイヤー「ああ。馬鹿だよな・・」

//ミラーナイト・ジャンボット「ガーンー!・・・」

馬鹿な一人に馬鹿と言われたのが余程ショックだったのか、その場に石像のように固まる//ミラーナイト・ジャンボット。呆れた風に溜息をつき、本を本棚に戻す光。

光（ああ～、本当にもう地球に帰りてえ・・・）

生まれて初めて平和が一番と思う光だった・・。肩に乗っているリリーも苦笑いしてるように見える。気のせいかな?

「ハウンダ3 ウルトラマンの偉い人と会おうー！」

光「で、今度は？」

冷え切った田で光に見られるウルティメイトフォースゼロたち。

グレンファイヤー（（おー、あの田・・））

ジャンボット（（あ・・完全に私たち、呆れられているな・・））

（汗）（）

ゼロ「ハ、今度はあるウルトラマンに会こに行くぞーー！」

そんな冷え切った気分の中、気分を少しでも良くなようと仕切り直しのように声を上げて、あるところへと向かう。そして、いつもレオと組手などをしている特殊な訓練場だった。中に入るとそこには、なんと・・。

ウルトラの父」遅かったな、ゼロ「

光「誰？あのウルトラマン」

光はウルトラマンの姿を見ても、ウルトラマンに関する知識がないため全く分からない。//ラーナイトは光に優しくてかつ、分かりやすく説明をした。

//ラーナイト「あのウルトラマンの名前はウルトラの父。名前の通り、ウルトラマンの父とも呼ばれていて、ウルトラマンの誰からも尊敬させているもの凄いウルトラマンなんですよ。今は、光の国の宇宙警備隊の大隊長を及び最高司令官をやっています」

光「フーン・・」

//ラーナイトの説明に興味なさそうに返事をする光。ウルトラの父も光の視線に気づく。

ウルトラの父「ほお・・? そつか君が噂の地球人の少女か・・」

ウルトラの父は目を細め、光の目線に合わせしゃがみ、優しく光に接する。だが、光はゼロの後ろに隠れ、まるで猫が威嚇するようにシャーーー!と声を上げる。

ゼロ「な、なんなんだ?」

ウルトラの父「はははーー!」

最初はキヨトンとしたウルトラの父だが、だんだんとその様子が

可笑しなったのか、ウルトラの父は珍しく笑つた。

光「何が可笑しいのよ……（怒）」

急に笑われ、光は憤慨とする。

ウルトラの父「いやあ、すまん。そつか・・地球か・・懐かしいな・・」

ついつい地球といひ言葉で昔を思い出してしまつ。

光「何？あんた・・地球に行つたことがあるの？」

ウルトラの父「ああ、昔に少しだけだつたけどな・・。私以外にも数多くのウルトラマンが地球に行き、色々逆に学ばせて貰つたものだ・・」

光「へえ・・」

地球とウルトラマンはそんな深い繋がりがあつたんだ・・。

ウルトラの父「おや？もつこんな時間か・・。すまないが時間だ。私は仕事に戻る」

そう言い出でていく前にウルトラの父は光に聞こえないようゼロの肩に手を置き、じつ囁く。

ウルトラの父（（よかつたな、ゼロ。まだチャンスはあるみたいだぞ・・））

ゼロ「・・はあ？」

それはどういう意味だ？と聞こうとしたが、ウルトラの父は黙つて、手をひらひらさせて行ってしまった・・。

ウルトラの父（（ゼロたちは、まだ気づいてないみたいだな・・あの子の心が・・））

光は、あんな態度を取つているが、本当に嫌いならああいつタイプは完全に無視をするはずだ。でも、光はゼロたちに本氣でぶつかつていい。もちろん、あの地球人の方も気づいてはいないだろう。自分の本当の気持ちに。

ウルトラの父（（あのゼロに懐いた地球人か・・））

昔のゼロではそう考えられないが、面白い。ウルトラの父にはとても興味がそそられる話だ。

ウルトラの父「だが・・・」

ウルトラの父（（あの子の気持ちに気づけないとは・・まだま  
だいちらも半人前だな））

ウルトラの父はゆっくりと仕事場に戻つていった。

## 懸念と光の国（後書き）

感想、お気に入り登録、評価をしてくれたみなさん、ありがとうございました！！^ ^

まだまだ感想待つてますので暇だつたらぜひお願いしますーー！

君にはきっと分からぬ（前書き）

私は人間が嫌いだ 煩いし、噂好きだし、その上、よく他人のことを知りたがる

おい、お前の家両親ないんだよな・・・？

こいつ知つてか、親戚にたらい回しにされて嫌々ここに来たらしいぜ？

さつさと転校しねえかな

実に鬱陶しい 不愉快な生き物だ

言つてもないことや思つてもないようなことを勝手に作り上げ、弱い人間を必ず虐める。

本当に怖いものって何？

人食い鮫？ 幽霊？ 化け物？ 生きている人間？ 違う・・・本当に恐ろしいのは

そんな人間を生み出してしまった世界の秩序と社会

この世界は見た目は美しいけれども、中身は疾うに腐っているの

だ

弱いものは死んで、強きものだけが生き残る まさに弱肉強食と言つ言葉が相応しいだろう

人は一人で生きられない・・?そんなの偽善者の綺麗事だ・・

じゃあなんで弱いものたちはあんな簡単に死ぬの?

何故この世の中に弱肉強食と言つ言葉が存在する?

答えはとても分かりやすい・・最初から決まっているの 生き残る者と死ぬ者は

運命の輪は決して消えない 呪縛の様なもの 人間の罪の印

私はそんな世界に呆れたのね・・きっと・・

昔、失くしたはずの涙が頬を伝う

そして、どこかで本当は願っている 世界が滅んでしまうことを

私の両親をあつさりと忘れた地球との世の中

こんな世界なんか壊れてしまえと・・

私は証明してみせる 人は一人で生きられるということを

仲間ナンテ必要ナイコトヲ・・・

君にはさうと分からぬ

光「…………」

今日もよく晴れてる。この国の世界の空は。私が青空を見上げている。ゼロが注意してきた。

ゼロ「おい、上見て歩いてんとぶつかるや」

光「フン、余計なお世話よ」

ゼロたちの光の国の案内はいつになつたら終わるのだろう?と思いつながら付いていく光。これからなんどどつかの国のお姫様に会いにいくらしい。ゼロの話によるとミリィーナイトとジャンボットたちの國のお姫様で、名前はエメラナ姫。エメラル鉱石という鉱石がたくさん取れる国だといつ。

光((まあ、興味はないけど……))

早く終われせて、家でゆつくりと寝たい。そう思いながら、歩くこと十分。なんか物凄い「ージャスな建物についた。

光((わあ……汗) さすが、お姫様。住む世界が違うといつ

かなんといふか・・・

「ぶつちやけ」の中に入りたくない。入ってもいい」と一つもなさ  
そうだし、むしろ疲れるわ・・。

ジャンボット「わっ！ 入るぞ。姫様はこの奥だ」

結局、中に入れられるし・・つわあ・・・ビ」も真っ白。

神殿のよな建物の奥にどんどんと足を進めるゼロたち。その前に  
私は何故か小さくなるようにミラーナイトに頼まれた。つたく！ 小  
さくなるんじゃなくて元に戻るって言えつーの！ お前らが無駄に大  
きいんだけなんだよ！ そんなイライラした中、一番奥の部屋から  
能天氣で明るく元気な少女の声がした。

エメラナ姫「ゼロ～！ ひちですよー！ ！」

ゼロ「おうつー久しぶりだな」

ひょこっと顔を出し、ぶんぶんと大きく手を振る真っ白なふわふ  
わなドレスを着た女の子がいた。歳は、私と近そう。でも、そんな  
少女をジャンボットはすぐに注意する。

ジャンボット「姫様つーはしたないですよーーそれにいつぞ」「で姫のお命を狙っている不届き者がいるか分からんですよー。」

〃ラーナイト「まあまあ、落ち着いてください、ジャンボット。少し神経質になりますよ」

慣れた手つきでゆづくとジャンボットを宥める〃ラーナイト。  
その少女は可愛い類をブックリと膨らませ、ブイッシュジャンボットの反対方向を見る。

エメラナ姫「そうですよ、全然怪しい者なんていないじゃないですか。それなのにジャンボットや〃ラーナイトたちは外に出て楽しそうに・・・私だけ除け者じゃないですか・・」

さつきの明るい態度から一変、急にしゅんとなるエメラナ姫。そんな姫の姿を見て流石のジャンボットがうつ・・・と声を詰まらせ る。

グレンファイヤー「わあー・・・ジャンボットがエメラナ姫を 虐めてるーーー」

光「最低ね・・男の風上にも置けないわ・・」

ジャンボット「なつ・・・違ひ・・・私は姫様のことを思つて・」

・

光「あつ、さうこう言い訳発言いから。つて言つがなんかその気持ち、重い・・」

ジャンボット「・・・」

お、重いと言われた！」の姫様の対する熱い思いが・・・！

ショーン・と端で密かに落ち込むジャンボットがゼロがドンマイと言つ風に肩に手を掛ける。そんなゼロたちは流れられ、話はどんどんと進んでいく。

〃ラーナイト「光さん、こちらはHメラナ姫。この前話した通り、Hスメラルダ国的第一王女。私の國のお姫様です」

Hメラナ姫「初めまして、Hメラナと申しますーあの・・貴方の名前は・・？」

光「・・・フン・・」

ああ・・やつぱりですか・・。

//ラーナイトは笑つてはいるが、困ったよつに眉らへんはハの字になつてゐる。仕方がないから、//ラーナイトが光に変わつて血口紹介をする。

//ラーナイト「姫。」ひらは、梅崎光さん。地球といつ星から來たそうです

「メラナ姫」「まあーお歳はお幾つなんですか？」

以上に皿をキラキラさせ質問していくので、気迫に負け光は一応答えた。

光「じゅ・・十五歳・・」

メラナ姫「じゃ、私と歳は近いのですね！」

ぱあとまた皿を光らせ、嬉しそうに話を掛けてくるエメラナ姫。

な、なんか調子狂う・・

はつきり言つて今までにないタイプだ。いつも時はビリビリの対処を取ればいいのだろう、取り合えずこいつの毒舌で・・・

光「はあっ・・・! どんなお姫様かと思ったら、能天氣なお姫様ね!」

ジャンボット「光つ!」

ジャンボットは光を咎めるがエメラナ姫は光の言葉の意味に気づいてないのか、恥ずかしそうに答える。

エメラナ姫「えへへ・・・／＼やつぱりそう思いますか? よくお父様やお母様にも言われました^ ^」

光「! ! !」

光（（こ）、こいつ・・・! ? 恐ろしいほど のスルースキルを持つてやがる! ! ）

「これがまさに天然系といつものなのか! ! ?

光はビックリし過ぎて声も出ない。ゼロたちもエメラナ姫の凶太い神経に日々驚くばかりである。

ゼロ「エメラナ・・・」

グレンファイヤー「ある意味凄いぜ・・・」

〃ラーナイト「あ、あはは・・・ わすが姫様」

Hメラナ姫「？」

もう保々苦笑いに近いゼロたちの表情にHメラナ姫は不思議につくりと頭を捻らせるだけだった。そんな中光が突然、Hメラナ姫を片手で突き飛ばす。

バンツッ！

Hメラナ姫「ああっ！――」

悲鳴を上げ、その場に尻もちをつぶHメラナ姫。ウルティメイトフォースゼロが姫の傍に寄る。

ゼロ「光！こきなりなんじ」としゃ・・・・・

さすがにこれは見過しえないと想い、光を非難するゼロ。だが、しかし・・・

ゾクリツ・・・！

ゼロの背中に今までに感じたことのない恐ろしい殺気が流れる。その殺氣は確かに光の目から出ている。まるで、闇に潜む殺戮者のようだ。光の漆黒の瞳が光なく冷たくゼロたちを見る。

光「あんたさ・・やつぱり、私が一番つ大嫌いなタイプだわ」

光はエメラナ姫を凍てつきそうな冷たい目で見る。そして、その目はどこか寂しげな色を飾っていた・・。

## 君にはさみつと分からぬ（後書き）

この話を書いてる時「あれ？ゼロってなんてエメラナ姫を呼んでたつけ？」と思つた。誰かわかる人、情報をください><！。

## 殺戮狼少女と無邪氣なお姫様（前書き）

昔・・小さい時・・・そうあれば私が六歳時、一度だけグレたことがある。簡単に言えば、不良みたいな感じである。まあ、すぐ飽きてやめたけど・・・。

今はなんであんな言葉に乗つてしまつたんだろうと想ひつ・・・

小学六年生の男子生徒六人を半殺し状態、全治約一ヶ月だつたらしい・・。理由はパパとママの悪口をしつこく言つていきたから。わざわざ小学一年生の教室の前まで来て悪口を言つ奴らだ、あん時はほんとウザかつた。

いつも言われていることなのに、ついカツとなりキレて・・そこから記憶がない。

気づいた時、そこにあつたのは血のついた自分の手。そして、その場に倒れ、恐怖に怯える少年たち。まるで化け物でも見ていくるかの様だ。

『お前らが私を本気でさせたんだかつ・・?』

私の声であつて、違うもの。その時、私はどこかで感じていた。一つ目は、自分は普通の人間ではないことそして、二つ目はきっとずっと私はひとりぼっちだということ。。学校ではすぐその噂は広がった。一年生が六年生六人を半殺しにしたという噂が。

私ハ、ナニモ悪イコトシテナイノニ・・・

その時、すぐ私は転校した。私が殴った子供の親から文句があつたらしい。ほんと奴らはまる賢い、自分たちがやつたことは棚に上げ、他の奴のことばかりだけ言つ。それから親戚の人も私を氣味悪がりはじめ、居づらくなり出てつた・・・。

そして、奴らは裏で私をこう言つた・・・ 殺戮狼少女とね・・・

一匹狼のように行動し、決して仲間を作ろうとしない孤高の少女。何より彼らが恐れたのは、彼女の本気の殺意の籠つた瞳。若干六歳であるで本物の暗殺者のように冷徹な目と怒りと恨みに満ちた悍ましいほどの声。地球人では、ほとんどの人は絶対に私には近づかないだろう。

だけど、そんな十五歳の夏の日、私の手の中に光が差してきた。掴みとれないほどの大きな力が・・・

私にはその光は眩しすぎるわ・・・

田を背けようとした時、後ろにあつた手を急に誰かに掴まる。

？？？『あき・・・ら・・めな・・・い・・でつ・・・』

光がその子から指してきて顔が見えない。

貴方は一体・・?

## 殺戮狼少女と無邪氣なお姫様

ムカムカするわ・・・あの子を見るとーー

光は巨大化してすぐ神殿を出た。後ろからゼロが追つてくる。

ゼロ「待つて言つてんだろーー！」

ゼロは私の手を掴んできたが、すぐに私はその手を振り払う。

光「もうこれ以上私に纏わりつかないでよー！」

光の怒号が辺りに響く。ゼロは、そんな光の背中を黙つて見ている。ほらね、やっぱり私を仲間なんかにすることなんかできなかつたのよ。

私は光 だけど、中身は闇。光と言つのは、ただの外見だけ・・・  
・心の中は真っ黒

だけどあの子はそんな私と鏡のように正反対の性格。まさに私より光という名が相応しいだろーー。だから、私はそんなあの子が

羨ましかつたのかもしない・・・。私なんかゼロたちとも馴染めてなんかないのに彼女はあんな簡単にゼロたちと打ち解けてた・。

彼女は日の光に当たつて生きてきて、私は口陰に当たつて生きてきた人間・・・

元から生きていく世界が違つたのだ

温室育ちのお嬢様と一人寂しく生きてきた、ただの地球人。仲良くすることなんて最初から無理だつたのだ。そう・・・そう思えばきっと楽だ。

光「お願いだから・・・もう・・・ほつといてよ・・・っ！」

違う・・・！本当はそんなこと思つてなんかない！－けど・・もう遅い、遅すぎたのだ・・。結局、誰も信じられなかつた。また私とリリーだけとなつてしまつた・・。

光は光に慣れなかつた・・・これが現実なのよ・・

光はさすがにもうゼロたちも自分に呆れて、離れていくだろうと思つた。目頭が熱くなるのを抑え、その場から消えようとした。けど、さつきまで黙つていたゼロが突然口を開き、怒つた。

ゼロ「ふさかこじゅなええーーー！」

光「ひーーー？・・・」

ゼロこと鏡までゼロの声で振動する。まつきつ言つて物凄く煩いーーだが、ゼロはそれでもまだ止まらず、闇を振り切るかのように手を目の前で振り払つた。

ゼロ「自分で言いたいこと言つておじやねーよーーーいつも勝手にしゃがつて・・・てめえはよーーー！」

そんなゼロの怒鳴の声に光も震える声で声を荒上げ、ゼロにあたる。

光「なんですよ・・?なんでそんなに私にこだわるのよーーあんたやあの子は仲間や家族だつてこぬじやないーー私なんかいなくつていじやないッーー！」

光「あめでよ・・ーもれ以上、私の心を搔き乱さないでよーーー。

いろんなこつもの私なんかじゃない・・ーそんなこと私が一番分かつていることなのにーーー！」

ゼロ「光・・・お前・・・もしかして・・・」

ゼロが光に近づいたその時、頭に頭痛が突如、出始めた。誰かの記憶と感情がゼロの中に逆流してきている・・・この記憶は・・・。

光だ。小さい時のあいつの記憶だ・・・

砂嵐のように掠れているが映像は一応見えるは見える。

ゼロ（（これも天馬の鍵の力だつていうのか・・・？））

光の記憶の中。そこには、光の奥底に眠る悲しみのすべてが眠っていた。葬式の中、一人寂しく誰にも気づかれぬよう声も出さず泣いている時、誕生日の日は、暗い部屋の中一人ぼっちで蠟燭の火を消した、あの光の表情・・・お帰りなさいやいつてらっしゃいもな、ただ家にいるのリストのリリーだけ。

そうか・・・いつの傍には・・・誰もいなかつたんだ・・・

誰にも悩み事を相談できず、涙を拭いてくれる人や、寂しい時も悲しい時も慰めてくれる家族も居ず、人なりの愛さえ貰えず、ただみんなに毛嫌いされ、育つていった悲しい悲しいお姫様。

ゼロ「…………」

ゼロはわかつていたようでわかつていなかつたのだ。光のずっと背よつてきた重い十字架に・・。そんな光をゼロは急に抱きしめた。まるで泣いている赤子を宥めるかのようになつた。

光「なあつ！？・・・ちよ！？離れなきことよつ・・・！」

必死に引きはがそうとするが、ゼロは離そつとしない。キックやパンチも何発かをゼロに本氣で殴つたが、ゼロはそれでも光を離さない。

光（（これがゼロの本氣だつて言つの・・！？））

認めない・・つ！そんなの私は認めない！

『カツ！-ズシュツ！-ズコツ！-』

鈍い音がゼロの体からする。「これは、グレンファイヤーのキックや拳より重くて痛いかもしない・・。ゼロの鍛えられた肉体に傷がつき始める。光は動物が威嚇するように低い声を鳴らす。今なら聞こえるあいつの・・光の悲痛な心の声が・・。

「の・・・・・のつ・・

離れろ・・・!離れろ・・・ツ・・

ゼロ「べつ・・・・・

離れろツツ!!私から離れろ!!

ゼロ「べふつ・・・・・

なんで?なんで・・つ!痛ければ、私を離せばいい・・それだけなのに・・つ!

痛みを堪え、ゼロはゆづくつと口を開き昔の自分のことを語り始めた。

ゼロ「俺は昔・・。いつもお前のように一人だった・・。ただ力だけを求め、決して手を出してもならないプラズマスパーク・エネルギー・コアに手を出し、M78宇宙警備法違反によつて捕まつて、俺は追放処分された・・

だんだんと光の怒りに歪んだ瞳と顔が大人しくなっていた。…。  
それからも次々とゼロは話した、レオとの訓練で感じたことやセブ  
ンとゼロの真実など、そしてウルティメイトフォースゼロのメンバ  
ーたちの出会いも。気づいた時にはもう光は完全に暴れなくなつて  
いた。前髪に隠れ今はどんな表情をしているかはわからない。

光「・・・・・」

ゼロ「光・・お前がもし、エメラナがなんも考えてないただの  
能天氣なお姫様だと思ってんだつたら・・・それは大間違いだぜ」

光「えつ・・・?」

ゼロ「あいつはベリアルに星を襲われ、一人だけで逃げてきた  
んだ。大切な家族や民衆を置いて、悲しい気持ちや悔しい気持ちが  
いっぱいの中、広大な宇宙の中をたつた一人ぼっちで・・それがど  
んなに辛いかお前には、分かるだろ・・?光・・」

あの時、両親が死んだ時・・。その時の私の頭の中はただ真っ白  
だった。そして、残されたものに来る本当の悲しみはほんのしばら  
く経つてからだ。

私はそんな同じ痛みを持つ子にひどいことを言つたのね・・・

光「けど…もつ無理よ。やつとあの子は私なんか許してくれない…許してくれるはずがないもの…」

光の顔は相変わらず俯いたまま見えない。だが、そんな光をゼロは真っ直ぐな瞳で見る。

ゼロ「そんなことねえよ…エメラナは、少なくともそんな奴じゃない。俺が保証してやるー。」

二つもの自由奔放なゼロだ。間違いない…。

本当…なんでこんな奴なのに、安心できるんだ？…?

こつもなり、誰かに触られると嫌悪感が出て、嫌がる光だが何故か今回、ゼロに触られるのは嫌悪感がでなかつた。そんな話をしている中、なんと…。

エメラナ姫「ゼ…エ…エ…光ちゃん…ゼロ…」

光（（ざつ…なんちゅー奴だ…走つて追つて来たのか…?））  
（お嬢様つ…まだ心の準備もできぬのに…つ…）

て云ふが、あいつには坂井あたと云ふのがないのか――！

そんなことでぐるぐると頭が混乱している中、自分と口のとの格好に気が付いた。

エメラナ姫「あれ・・・？ゼロと光さんは何して・・」

光「わああああああ――――――!?!?」

私はついついゼロの足のつま先をギュウと強く踏んづけてしまつた。

あつ・・。いつけねえ・・・

ゼロはその場にしゃがんで足のつま先を抑える。ゼロは、涙目ながらで光を睨む。

ゼロ「この野郎！ いきなり何しゃがる・・・」

！この馬鹿がッ！」

照れている赤い頬をゼロに見られないよう反対方向を向く光。その反対方向には、エメラナ姫の姿がある。光はすぐ真剣な表情に戻り、姿を元の大きさにしエメラナ姫にゆっくり近づく。その時だ、微かに天からコンクリートの欠片のようなものが落ちていた。

光「・・・？」

光が上を見ると建物の上に妙な人影があつた。よく見ていたら、人影は私の視線に気づいたのかその場から消えた。その後、何故か人影が見えた建物が一部が破壊され、エメラナ姫に向かつて崩れた。

光「！！」

いち早く気付いたのは、光だった。その後、ゼロたちもすぐ気づく。

グレンファイヤー「おいつ・・・！あれ！」

ゼロ「ヤバいッ！・・逃げろ、エメラナ！－！」

ジャンボット・ミラー・ナイト「姫様つ－！」

エメラナ姫「きああああ－－！」

緊迫感が募る中、光が驚きの行動に出た。

光「邪魔よ・・・馬鹿・・・」

エメラナ姫「えつ・・・？」

ドンッ・・・

光はいつの間にかにエメラナ姫の傍に寄り、小さく呟いたその次の瞬間、光がエメラナ姫の体を強く突き飛ばした。そのおかげで、エメラナ姫は建物の下敷きにならず地面に突き飛ばされるだけで済んだが、その代り、さつき居たエメラナ姫の場所に光が残った。つまり、身代わりになつたのだ光は。

エメラナ姫「光さああんッ！――！」

ゼロ「光ッ・・・？」のつ・・・馬つ鹿野郎おおお――――

光に瓦礫が当たる三秒前、二秒前、一秒前・・・。

ゼロ（（ダメだつ・・・間に合わない！――））

ゼロ「くそおおおおお――――」

ゼロがそう叫んだ時だった。光の体に閃光が走る。

? ? ? （（姫は私が守る・・・！））

光「この声は・・・？」

? ? ? （（いけない！！それから離れてください！））

間違いない、地球でベリアルに襲われた時、助けてくれたあの時の声だ。光の発生源を見るとそれはなんと、信じられないものだからだった・・。

## 殺戮狼少女と無邪氣なお姫様（後書き）

そつー次回からまたオリキヤラ追加ですよーーーへへ  
みなさん、楽しみにお待ちくださいーーー。  
読者の人たちからの感想も楽しみに待つてあります。

偽りの友・・・？（前書き）

ねえ・・・？もし、あなたの友達が自分の知らない顔を持つていたら

貴方はどうしますか・・・・？

## 偽りの友・・・?

光り輝く閃光に目を開けられないゼロたち。光が弱まり、気づいた時には、瓦礫の姿はもうなかつた。だが、代わりにそこにいたのは見知らぬウルトラマンの姿だつた。

エメラナ姫「ウルトラマン・・・?」

上半身に薄黄色のラインと下半身には銀色に輝くシルバーが強調されていて、瞳は他のウルトラマンに負けないほど光を持つている。光は瓦礫の上に降りされ、そのウルトラマンと向き合つ姿になつてゐる。

ゼロ「誰だ・・・? あいつ・・・」

この国では、見かけたことのないウルトラマンだった。そんな中、絶句している光がゆっくりと咳く・・・。

光「そんな・・嘘・・あなた、もしかして・・・」

光は頭の中では、そんなはずないと否定しているが何故かそうだとわかつてしまつた・・・。いつもより心臓が早くそして激しく動いている錯覚に刈られる。

わかる・・私にはわかる・・・。

デクンシードックンシード

光「リリー・・・なの？」

リリー「…はい。姫様」

ガシャアン・・・・！！

その時、何か光の中で壊れた。何か大切な物が壊れていた……  
だが、そんなことも知れず、ゼロたちは騒ぎ立てた。

ゼロ「はあ・・・?えええええ! ! ?」「

グレンファイヤー「マジかよ・・・」

「ハーナイト」や、それはなんと・・・？」

ジャンボット「そんなことが・・・」

まさかあの小さくて非力な動物が実は自分たちと同じウルトラマ  
ンだとは思わなくて、ゼロたちはすっかり興奮している。そんな時、  
パーン・・と何かが弾かれる音がその場に響く。光がなんどリリ  
ーを平手打ちしたのだ。小さい手だが、見事にリリーの顔面を打つ  
た。

ゼロ「なつ・・・!?

ゼロたちは予想もしてなかつた展開にビックリしてしまひて停止した。光は小さくふつぶつと呟く。

うそ・・つき・・！・しん・・・てたのに・・つ！・！

光は、キツと怒りに満ちた瞳でリリーを睨みつける。その目尻に  
せ、やうつむき光る何かが付いていた。

光「嘘つき！信じてたのに・・ツ！」

ゼロ「お、おい！光ッ！？」

グレンファイヤー「どう行くんだよ……」

エメラナ姫「待つてください！光さん！？」

ジャンボット「ひ、姫様！？」

そう言い残してどこかへ走り出してしまう光。ゼロたちも追いかけようとしたが、何せ今の光の体は小さくすぐに見失ってしまった。エメラナ姫以外は・・・離れようにも、あのウルトラマン・・リリーもほっとけは置けない。

「リーナイト」だ、大丈夫ですか？」「

近くに寄り、リリーの顔を窺うミーラーナイト。よく見ると蚊に刺されたのかのように一か所が腫れている。多分セツキ光にぶたれたところだらう。

リリー「大丈夫です・・・お見苦しいところをお見せしてしまって、どうもすみませんでした」

「リーナイト」い、いえ！ とんでもない・・・

ニセなりペココと頭を下されたので逆に恐縮してしまうミーラーナイト。

「リーナイト」よかつたら我々に話してくれませんか？ あなたはどうから来たのか、あなたは一体何者なのかを・・・

リリー「そうですね・・・あなた方はあのベリアルからも姫を守つてくださいましたし・・・それにもう、潮時かも知れませんね・」

・

リリーはゆっくりと立ち上がりゼロたちをもう一度見つめなおす。

リリー「まあ、お話をしよう。私たち、天馬族の真実を・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

光「・・・・・」

適当に走り回つて、どこか知らないとにかく見渡しのよい綺麗な場所に出た。光はそこで一人しゃがみ俯いたまま。風もヒューヒューと光の髪に当たつて心地よい風と共に靡く。だが、今の光にはそんなものは感じられなかつた。

光「・・・リリー」

たつた一人の家族で親友。でも、もう違つ。そんな関係ではいられない。

光「・・・姫つて誰なのよッ・・・」

私はただの地球人、これからもその先もずっとそうだと思つてきた・・・でも、何がが違う・・・何がが引っ掛かる。思い出せない、とても大切なことなのに・・・。

私はなんか姫じやない・・・お願いよ、リリー・・・

光つて・・・呼んでよ・・・

ズキン・・ツ!!

光「うあ・・・っ！」

またあの頭痛・・・！今度は何・・？何を見せつもりなの・・・？

ザザツザー・・・！

砂嵐の記憶の中、無限に咲き誇る花畠に一つの影が見える。一つはあのドレスを着た少女ともう一つは・・・

リリー・・・？

その記憶に移っているリリーの顔はとても幸せそうで実に充実した毎日のようなだ。その隣に座っているあの子も笑顔で花で作った王冠をリリーにあげる。リリーの大きさには合わないが、リリーはそれを嬉しそうに貰つ。

何よ・・・これじゃ私だけじゃない・・・！一人ぼっちなのは・・・ツ！――

ざわりと光の心に孤独の波が打ち寄せてくる。鼻がツンとして痛い、涙を我慢するのが辛い。記憶はそこで終わり、ただそこに残されるのは喪失感と孤立感。

光「・・・ツ！」

我慢しきれなくなり嗚咽が漏れそうになるその時。

エメラナ姫「そんなどこに居たんですね、光さん」

光「！！」

ビクリと体を跳ね、後ろを振り返るとそこにはエメラナ姫が立つていた。

光「何の用・・・」

エメラナ姫「私と一緒に帰りましょ？ゼロたちも心配している  
と思いますし・・・」

光「私はいい・・・」

エメラナ姫「どうしてですか・・・？」

光「見たのよ・・・」

エメラナ姫「見た・・・？何をですか？」

光「リリーは多分昔、私と違う女の子と暮らしてた・・・。何らかの事情で今は私といふけど、きっとリリーは彼女と居たかった

あんなリリーの幸せそうな顔、初めて見た。その時、私はなんとなくわかった。私のつけ込む隙なんてない。

光「リリーが守りたいのは私なんかじゃない、あの子なのよ・・・」

「・・・」

エメラナ姫「光さん・・・」

行き場のない怒りと悲しみを全てエメラナ姫にぶつけてしまう光。エメラナ姫はよく詳しい事情は分からないが光の苦しみが伝わってきた。

光「私にとつてリリーは・・・」

唯一の・・・家族だったのよ・・・ツ！

パーンツ・・・！

ん？つてええええええええ！・・・？

なんと今度はエメラナ姫が光の頬を平手打ちしたのだ！

何、今のぶたれたの？その割に全然痛くないんだけど！

光はビックリして涙も何も引つ込んでしまった。その代り、エメ

ラナ姫の綺麗な目からポロポロ涙が零れていた。

光「なんでお前が泣くんだよ！？」「

むしろ、こっちが泣きたいわ！まあ、おかげさまで、今まで引つ込んでしゃったけどね！」

エメラナ姫「だつたのではなく、なのでしょ・・・？」

光「え・・・？」

エメラナ姫「リリーは大切な家族なのでしょ！だつたらなんで信じてあげられないのですか！！」

怒られた・・・。あの、のほほんとした能天氣お姫様に怒られた！？この私が！！

光はエメラナ姫に怒られたのが余程、衝撃的な出来事だったのか呆然としたままエメラナ姫の話を聞く。

エメラナ姫「家族じゃないなんて冗談でも言つてはいけません！！失つてからもう手遅れなんですよ！確かにリリーは何かあなたにまだ隠し事をしているかも知れません！でも、それはきっと何か訳があつて話せないだけなんだと思います！」

光「な、なんであんたにそんなことがわかるのよーー。」

エメラナ姫「わかります！だって、ミラーナイトもジャンボットもいつも私のために一生懸命になって・・守つてくださいますもん！」

ミラーナイトは闇を打消し、私の元に帰つて来てくれた。ジャンボットだつて、私のためにベリアルと戦つてくれた。いつもいつも私を大切してくれた！

エメラナ姫「私はあの二人を誇りに思いますーー。」

光（ほ、ほんとなんなのよ・・・？）（いつ！ーー。）

エメラナ姫のその迫力に怯む光。エメラナ姫の目には堅い意志があるように見えた。

エメラナ姫「それに光さんをずっと長い間、見守つてくれたのではないですか？リリーは・・」

光「・・・」

リリーが光のところに来たのは、九年前。あの荒れていた時期にある。リリーがいつも傍にいてくれたから光は一人じゃなくなつた。暗くて冷たいあの世界から抜け出せた。

九年間も私なんかのために傍にいてくれたの……？リリー……？

光「・・・帰る」

Hメラナ姫「え・・・？」

光「だ・か・ら・・・」

光は顔をちよつぴり赤らめ、Hメラナ姫に向かって言つ。

光「帰つてやるつて言つてんの！」

Hメラナ姫「・・・はい！～～」

そう言つて、立ち上がるとゼロたちが自分たちを探している声が聞こえた。

Hメラナ姫「ああ！行きましょう」

光「あつ・・・ちよつと待つて！」

Hメラナ姫「なんですかー？」

頭をこいつくりと捻つているHメラナ姫。光は「ゴーゴーゴー」とHメ

ラナ姫にこう言つた。

光「その・・あの時は突き飛ばして悪かった。それと私のこと  
は光でいい・・」

Hメラナ姫「え・・・? それって私を友達に・・・!」

光「ちょっと・まだそれは認めてはないから・・・!」

慌てて訂正する光。だつて、このままじゃ本当にやうやくせられて  
しまいそうな気がしたから。

光「後・・それと・・・」

今までの声よりさらに小さくなる。たゞがのエメラナ姫も聞こえ  
ない。

Hメラナ姫「? なんて言いました? ?」

光「内緒!」

Hメラナ姫「え、ええーー! ?」

光の後を追いながら、本当になんだつたのだらうと考えるエメラ

『ありがとう・・・』

## 朽ちた種族（前書き）

いつか一人のウルトラマンは「」がどこかも分からぬ宇宙の中で書いた

私は永遠と存在する者　だから私は・・・私だけは貴方の傍に  
いましょう・・・

例え　この身が朽ち果てようとも　　ただ貴方の傍に・・・

ただ貴方の声だけを探しましよう　　決して　　どんなことが在  
ろうとも・・・

光とエメラナ姫の時間から少し遡り、ゼロたちの方はといつと・

リリー「さあ、お話ししましょう。私たち、天馬族の真実を・  
・」

グレンファイヤー「天馬族の真実・・?」

ジャンボット「この前、ライトが話したのとは違うのか?」

リリー「いえ、私が話すのはその話の千年後・・。私と姫がいた時代の話です」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

約一億年前の話・・・惑星カンタルナ

私は天馬族の王女を守るために天馬の体の一部から生まれた孤高の戦士でした。私はただその時代の王女の命令にしたがい、邪魔者は始末してきました・・でも、そんな私に心というものを教えてくれたのがカンタルダ第一王女プリンセス・ペガル・ティアラ様でした。天馬族の第一王女は、不思議な力を持つて誕生します。その力が天馬の魂を・・・王の王冠クラウン・クラウンを復活させることができる力なのです！

ゼロ「ちょっと待てよ！光とそのティアラっていう奴がなんの関係があるんだよ！」

リリー「光様は・・・そのティアラ様の魂を持つてます」

ウルティメイトフォースゼロ「「「「――」「」」

ミラーナイト「つまり光さんはそのティアラという人の生まれ変わり・・・？」

リリー「はい、光様の前世と言つても過言はないでしょ？？」

ジャンボット「じゃあ何故、前世の筈のティアラの力が今の光に・・・？」

リリー「多分、ティアラ様は・・・使ってはいけない禁忌の法を使つてしまつたのでしじう・・・」

グレンファイヤー「多分・・・？多分つてどうこうことだ！お前はそいつの傍にいたんじやねえのか！」

グレンファイヤーは声をつい荒上げてしまつ。いきなりの展開に付いていけでないのだろう・・・。リリーは続きを話すよつに静かに語り始めた。

その時、国に突如攻撃してきた者がいたのです。私は姫を守るため、そいつと戦いました・・けど、私の力は足りず、戦いに敗れ、どこか別の遠い宇宙の中に飛ばされてしまいました・・。私は必死に探し続けました。ここがどこすら分からぬのにただティアラ様の魂を頼りにして一億年という月日が経ち・・そんな時、地球上にティアラ様の魂のオーラがしたので、私は地球に降り立ちリストに変身して姫様を探しました。そして、そんな生活を六年間・・ついに私は姫様を見つけました。けど、そこにいたのは・・・見知らぬ少女でした。見た目も性格もまったく異なっていました。でも、確かにその女の子から姫様と同じオーラが流れてました。私はその時、今度こそ姫をお守りすると決めたのです・・。例え、姫様が私のことを覚えていなくとも・・私は・・私は・・・っ！

「ランナイト」・・・

「ジャンボット」・・・

一人には、その気持ちが痛いほどよく分かった。姫を守りたいといつ気持ちは誰にも負けてはいけないから・・・

グレンファイヤー「なんで、その禁忌の法ってなんなんだよ・・・？」

リリー「禁忌の法・・自分の肉体を捨てる代わりに、魂を違うものに移す法のことです」

ゼロ「なんでそんなことを・・・」

リリー「姫様は・・王の王冠クラウン・クラウンだけは守るつとしたのです・・・。あれは、絶対に目覚めさせてはならないものなのです・・・」

ジャンボット「命を懸けても守らなければならなもの・・・か

ゼロ「その、お前たちの星を襲つたのは誰なんだ・・・？」

ゼロの声には、怒りが少し含まれている。リリーはゆっくりと答えた。

リリー「カイザー・ベリアル・・・です」

ゼロ「…………」

ジャンボット「そんな・・・ビビッサッて・・・!?」

ミラーナイト「もしかすると・・・この前の戦いの時、ベリアルは大量に体内の中にエメラル鉱石を入れていました。ウルティメイトゼロの攻撃とエメラル鉱石がぶつかり、多次元宇宙の扉がわずかに開いてしまって、リリーたちが住んでいた宇宙に繋がつてしまつたのではないのでしょうか・・?」

おまけに一億年という長い時のせいでの、ベリアルの体は修復され、前よりレベルアップしてしまった。

ゼロ「そんな・・・」

俺たちの戦いのせいでリリーたちの世界は壊れてしまったのか・・!?

ゼロはリリーの前でがっくりと頑垂れる。他のメンバーも顔を伏せる。

ゼロ「すまねえ・・・リリー・・俺たちのせいで・・・

リリー「…ビ、どうしたんですか？」

ゼロたちはリリーに説明した。ベリアルがどうこう奴が、そして、元光の国のウルトラ戦士だということ、どうしてベリアルがそちらの宇宙に行ってしまったかも何もかも説明した。

リリー「そうだったんですか…」

ゼロ「本当にすまねえ…！」

リリー「いえ・・もう一億年前の話ですし、私の力不足だったんです。それに、不自然な点が一つあるんです」

＝＝＝ラーナイト「不自然な点…？」

リリー「カンタルダ国には、結界が張っていて、そう簡単には破れないはずなんです・・。つまり、天馬族の中に裏切り者がいた・」

・

グレンファイヤー「・・・！」

ジャンボット「そつか・・・それなら辻褄が合つ・・」

何故天馬族が滅んでしまったか・・　これで謎は解けた

リリー「まだ、全部を話し終えたわけではありませんが…お願いします。私に…いえ天馬族代表として力を貸してください！」

グレンファイヤー「何水臭い」と言つてんだよーバーカ

リリー「いたつ！」

「チーン とリリーの頭に拳を軽くぶつけ、リリーの肩に手を組む  
グレンファイヤー。

リリー「それじゃあ…」

ジャンボット「ああ、喜んで力を貸そう…。元々私たちのせ  
いでこうなったのだからな…」

リーナイト「姫を守る戦士同士、仲良くしましょう」

ゼロ「どういふことだ…よろしくなあーリリーーーー！」

リリー「みなさん…ークスンッ…ー」

感激のあまり感涙してしまつコリー。

グレンファイヤー「おこおこ、泣くなよ」

ジャンボット「そうだぞ、孤高の戦士ならしつかりしな」

リリー「はい！・・・」

ゼロ「よし！光たちを探しに行くぞーーー！」

ଓଡ଼ିଆ - ୧୦

方その頃、どこかの宇宙にある廃墟の星では・・・。

『天馬の鍵、捕獲、失敗しました』

ベリアル「この役立たずが！！」

ベリアルは容赦なく鋭い爪でダークロップスの顔面を切りつける。ダークロップスはガガツ・・・！と鈍い音を漏らしながら、その場に倒れ二度と動かなかつた。

ベリアル「チツ・・・！」

ベリアル（印を手に入れたのはいいが・・まだ肝心な鍵は奴らが持つてる）

ベリアル「なんとしても必ずゼロより先に王の王冠クラウン・クラウンをこの手に・・！」

薄気味の悪い場所にベリアルの赤く悪魔の様な瞳がよく似合つ。ベリアルの邪悪な願いは、真っ暗な宇宙のどこかに溶け去っていた。

朽ちた種族（後書き）

なんか最近・・感想が少なくなつてしましました・・（涙）  
作者は猛烈に寂しいです^v^。

誰かあああー！助けてくださいー————！————！————！

## 歓迎パーティー

リリー「あの・・・その・・・ひ、姫・・・」

光「待つた」

リリーはどう説明していいか分からず、うろたえていると光はそれを察するように目の前で手を伸ばす。

光「話したくないなら今無理に話さなくていいわ」

リリー「え・・・？」

リリーだけじゃなく、その場にいたゼロたちも驚いている。光はリリーを真剣な表情で見つめる。

光「私は・・・リリーが自分から話してくれる日を待つわ・・・いつまでも・・・でも、勘違いしないでよねーまだ私は、嘘をついたことを許したわけじゃないわよ」

リリー「分かつてます・・・」

光「あなたの名前は・・・？」

リリー「・・・？」

光「だから・・・あなたの名前は何！？」

リリー「・・・リリー・・・、リリー・ビーストです！！」

リリーは、嬉しさのあまりまた泣き出してしまつ。光は何故かそんなリリーの姿を見ていると無性に抱きしめたくなつた。気づいた時には、体が勝手にやつていた。

リリー「・・・ひ、姫様・・？」

光「分からぬ・・。でも、なんでだらう・・？あんたをこう抱きしめたくてしかたないの・・本当馬鹿な理由よね・・」

リリー「うう・・・」

初めて抱きしめるはずなのに、どうしてこんなに懐かしいのだ  
る？・・？

どうしてこんなにも愛おしく、暖かく感じるのはうつ・・・？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんやかんやで光の国で三日間過ぎた。家の時はいつも変わらずリストの姿をしているリリー。一つ違うのは言葉が話せるようになつたぐらいだ。こんな生活にも光も慣れてた頃、突然ゼロがあの話を持つてきた。

光「はあ？ 歓迎パーティー？ 私とリリーの・・・？」

ゼロ「ああ。結局、なんやかんやでやつてなかつたしな・・・。今日、やるこことになった」

光（（きゅ、急ね・・・））

相変わらず、ウルトラマンたちのペースには付いていけない光。そして、何故か小さくなり堂々と光の家を私物化しているゼロたち。まあ、もつこれも慣れたという顔している。歓迎パーティーという話には困惑するように光は戸惑つ。

光「いいわよ。私はそんなことされん歳でもないし・・・」

グレンファイヤー「そんなこと誰つなよ。それに・・・」

グレンファイヤーは、黙つて一点の方に向に指を指す。私はああ？ という感じで見るとそこには、リリーのくじくじとした黒い瞳がキラキラと輝いていた。

リリー「パーティーですか・・・」うつつの何年ぶりですかね、

姫！！

光（（コリー！？？？））

うああああ！！何あの瞳！？めっちゃ行へきやん！物凄く行きたいオーラー出してんじやん！？やあう・・・いや・・・まだ諦めるな私！！何か手があるはず・・・つ・・・！

光「で、でもリリー・・・」

リリー「楽しみですね！姫様へへ！」

がはあっ！！ 口から血が出そうだわ・・・ 今までにないおねだり攻撃が私を襲ってきた。

もうダメだ・・。光は取り合はず、そのままたたいた。もう保々やけくそのようにゼロたちに言い放つ。

光「あああ～～～！！！もづ、行けばいいんでしょ！行けば！

「！？」

「あくべじょうーー、ゼロめー・・・！後で覚えてるおおおーー！」

!!

」ついして慌ただしく、パーティーの準備が始まったのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

光「で、どこに連れて行くつもり?」

ゼロ「いや、パーティーのことなら女同士で話し合った方がいいってオヤジがいうから・・・」

私はゼロに連れられ、何故か立派な建物の中にいた。ドアが開くとそこには、女のウルトラマンと思われる一人のウルトラマンがこっちこっちと手を振っていた。

コリアン「ゼロ～！これに・・・！」

ゼロ「コリアン！それに・・・！」

一人の女のウルトラマンがこちらに近づいてくる。一人は、おつとりとして優しそうで、もう一人は元気のあるお姉さん系のウルトラマンだ。

ウルトラの母「久しぶりですね、ゼロ。随分とこんなにたくましくなつて・・」

ゼロ「よ、よせよーー！」など「ハハハ…－／＼／＼／＼」

ウルトラの母に頭をなでなでされ、顔を真っ赤にさせたゼロ。やんなゼロの姿を見て、ゴリアンはクスリと笑つ。

ゼロ「ゴリアン！－／＼／＼／＼」

ゴリアン「あい？」みんなさーへへつこつこ・・・・

ゼロ「へへ…－／＼／＼／＼」

光「あのわー、」のウルトラマンたちが誰なのさ？ゼロ

ゼロ「やうだつた！・・『ホンッ！』

ゼロは咳払いをして空氣を立て直し、光に説明をした。

ゼロ「」にはゴリアン。「」ウルトラの星の王女だ。で、こ  
っちはウルトラの母。いつもは、戦闘で傷ついたウルトラ戦士たち  
の救護や看護活動をなどをしている」

光（（また王女かよ・・・））

頼むからいい加減ノーマル来てくれ……と願う光の中に、コリアンとウルトラの母が話しかけてくる。

「コリアン、初めまして！コリアンよ、ようじくー！」

ウルトラの母「マリーです。よく周りの人からウルトラの母と呼ばれています。ようじくお願ひしますね、光」

光「ああ、はあ……」

光は返事に困り、取り合えず適当に促した。

「コリアン、『歓迎パーティー』に着ていく服なんだけど、これはどうぞ」

さつそぐ、コリアンの手に何か握られていた。それは、まるでアーメに出てきそうな真ッピンクな色でフリルがたくさん付いてるドレスだった。さすがの光もこれには、ドン引きだ。服を着ないゼロでさえ顔が引きつっている。

「ウルトラの母」「うーん……。こっちの方もいいと思っていますよ~」

今度は、赤紫色の大人っぽい服のドレスだ。確かにさつきのよりはマシだけど……いやいや！ そういう問題じゃない！！ 私ドレスなんて着たことないし、それにだいいち、スカートは苦手だ。むしろ、大嫌い！ 動きずらいし、気を使わなければならなくて正直言つて疲れる。ウルトラの母とコリアンがそんな光に急に話を振つてくれる。

コリアン・ウルトラの母「光は、ビックリがいいと思つ（思いますか）？」

光「だが、どちらも断る……」

光は、その瞬間、誰も見たこともない物凄いスピードでその場から去る。その姿は、脱兎の「」とくのよつだ。

ゼロ「えええ！ ……？」

ゼロ（（逃げやがった…………あいつ…………））

ゼロは、ツツコミながらも光をなんとか追いかけた。コリアンとウルトラの母はドレスを手に握り、ただ一人の後ろ姿を見つめるだけだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゼロ「急に逃げ出すなよ……」

光「うるせえーあんたのせいで私は危うく、あのドレスの犠牲者になるとこりだつたわっ……」

ガタガタと恐怖に震える光、よほど嫌だつたのだろう。

ゼロ「どんだけ嫌だつたんだよ……（汗）」

そうゼロは、咳くが今の光にはそんなことは聞こえない。

光（（ああ、思い出すだけで悪寒が……））

ブルブルと小刻みに体は震えた。どんなヤンキーよりも恐ろしい。  
・。

光「取り合えず、私、しばらくあの危険人物たちと会いたくな  
いわ……」

光（（Hメラナ姫よりあのウルトラマンは、やばー…服を選ぶ  
ときのあの野生の目……））

エメラナは、半端ないスルースキルを持っているが、あれは違う意味で光の天敵だ。女のパワーと言うかなんというか・・・とにかく、エメラナ姫の次に油断できない人物たちだということはわかつた。

光「でも・・」

こんな風に女人とちゃんと話したの久しぶりだった。最後に話した人は、確か・・ママが亡くなる前だ。最後になつた会話はどこにでもありそうな普通の会話・・・。

『服、小さくなつちやつたわね。今度、買いに行きましょっか！』

『うん！』

『その時はパパに内緒でおいしいものでも食べちゃうっ』

『ダメー！！パパも一緒にいいよーー！』

『うふふ、光は優しいのね！』

その時はこんなことになるなんて夢にも思わなかつた。淡く、脆く崩れていった日常。もし、あの時・・あれが最後の会話になるつてこと知っていたなら私は何を話していただろう・・・・?

光「・・・・・・・・・・・・

ゼロ「?光・・・?」

ゼロに声を掛けられて、我に返る光。

いけない、いけない・・つー・こんなことを今更考えるなんて・  
・私・・・どうかしてるわ・・

光「何でもないわよ」

光は笑つて誤魔化した。光のそんな表情を見てたらゼロはそれ以上問い合わせられなくなってしまった・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時は昼から夜になり、パーティーの時間になつた。場所は、エメラナ姫の泊まつてゐる神殿の中。ゼロたちが着いた時には、もうみな殆んど来ていた。来ているのは、主にウルトラ戦士のみなさんやなんとウルトラ兄弟もいる。光は結局、最後までドレスなどのおめかしを嫌がりいつも着てゐる私服で来てしました。

光「わりと広いのね～・・・」

地球とは違う神秘的な感じがする。リリーは、落ち着かない様子で辺りをそわそわと見る。

光「何やつてんのよ、リリー・・・」

リリー「あっ・・・いや、その・・・なんか嬉しくてついについ・・・  
／＼／＼すみません、姫様」

光「お前は子供か！！」

つたく！こんなところにまで来てはしゃぐな！！

光「それと後、その姫様やめい！」

リリー「いえ、姫様は姫様なので！！」

そんなことキツンとした田で言われても困る。それと後、もつ意味が分からん。

光とリリーの会話を聞いていたグレンファイヤーがゼロたちに聞こえないぐらいの小さな声で呟く。

グレンファイヤー「漫才・・・www」

光「あ、あ？ 何か言つたか？」「ラア！」

グレンファイヤー「ちよつ・・・・お前地獄耳だな！」

ジャンボット「コラコラーお祝いの場で喧嘩するな！！」

光一 うつさい！鶏！！親子丼にすんわよ！！」

ジャンボット「ガーン!! .. .に、鶴つて言われた .. .!!

ゼロ「お前、もうチンピラみなセリフになつてんぞ、光」

ミーラーナイト「元気出してください、ジャンボット」

不毛な話をしている中、声を掛けてきたウルトラマンたちがいた。

「ダイナ「おつーお前たちが、地球人の女の子とウルトラマンって！」

「コスモス「確かに、名前は光とリリーだっだけ？」

光「そうだけど・・・あんた達、誰？」

光がそう言つと、早速ミラーナイトが説明に入る。

ミラーナイト「こちらのウルトラマンは、ウルトラマンダイナ。そして、隣にいるのはウルトラマンコスモス。この人たちも地球にいた時があるんですよ」

光「ふーん」

ダイナ「まあ、そういうことだ！ よろしくな」

「コスモス「よう」」そ、光の国へ。光「

光「・・・」

リリー「姫様・・・」

光「・・・分かつてるわよ、言えばいいんでしょー・言えばーーー！」

はあーと溜息をつきながら、光は改めてダイナたちを見てお礼を  
いづ。

光「ありがとうございます・・・」

かなり愛想のないお礼の言葉だつたが、ダイナたちは一ヶ ハコと  
笑い「頑張れよ」と言い残し、どこかに消えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゼロ「ホヤジー」

セブン「おお、やつと来たか

セブンは周りこいたウルトラマンたちと、色々と雑談していたよ  
うだ。

セブン「何かあったのか?」

ゼロ「いや、そこでダイナたちと会つて、ちよつと話してたら  
遅れただけだ」

セブン「そうか・・・そうだ、光君。あるウルトラマンたちに君を紹介したいんだがいいかね？」

光「誰に紹介するつもりよ」

セブン「ウルトラ兄弟たちにだ」

セブンがそう言つとさつきまでセブンの傍にいたウルトラマンたちが一斉に振り返る。

ゾフィー「こんにちは、光。私はゾフィー、ウルトラ兄弟の長男で今は宇宙警備隊の隊長をやつている」

タロウ「俺はタロウ。ウルトラ兄弟の六男だ」

レオ「私はレオ。七男でここにいるゼロの師匠みたいなものだ」

ヒカリ「こんにちば、私の名前もヒカリと言つんだ。ウルトラ兄弟では、十一男。よろしく頼む」

次々と自己紹介するウルトラ兄弟。光は、ある人物の話にとても興味を持っていた。

光「へえ～、ゼロに師匠なんかいたんだ」

ゼロ「いやが悪いかよ」

光「いや、別にー」

ゼロ「じゃあなんだよー。」

光「ただ、あんたみたいな奴に師匠をやつてくれる人物がいるなんて意外だなーって思つて」

ゼロ「なんだとーーー。」

光「何よー。」

火花を飛ばすように睨みあつ一人。 その他のウルトラマンはそれを面白そうに見ていた。

ヒカリ「なんかあのー入つて、似た者同士ですね」

ミラーナイト「やつぱりそう思います?」

レオ「あれなら、訓練でも付けければすぐ強くなりそうだな」

ゾフィー「女の子にそんな危険なこと教えちゃダメですよ、レ

オ」

レオ「ああ、分かつてる。 ただの[冗談だ」

タロウ「本当に冗談か？」

半分疑惑の目でレオを見るタロウ。ゼロはタロウにこう言つた。

ゼロ「大丈夫、本当にやつてもこいつはそう簡単にくたばつたりしねえよ」

光「あははは、ゼロ後でぶつ飛ばす（怒）」

ギュッと拳をつくつて、ニッコリと笑う光。何故か黒いオーラが光を取り巻いてる。ゼロは慌ててその場を離れるが、光は獵犬みたいにゼロを追いかけ回す。また、始まつたとグレンファイヤーが咳き、ジャンボットは呆れ、ミラーナイトはまるで小さい子を見守るようかの瞳で見る。リリーは「頑張つてくださいーー姫様ああーー」と止めさせるどころか光の応援をする。他のウルトラ戦士たちも光とゼロの会話が面白かったのか、ただ笑つてはいる。そんな楽しい夜のささやかなひとときに響くウルトラマンたちの笑い声は、しばらく止むことはなかつた。

## 歓迎パーティー（後書き）

私は光の国に夜というものがあると信じていろ……つとこいつ氣持ちを込めて書きました（笑）

感想と評価をしてくれた読者に敬礼を送りたい！！そして、ありがと――！！！！

## 不良な師匠と真面目な弟子？

今日も変わらない普通の風景。だが、建物の影で一人のウルトランの少年に絡んでいる金色の怪人がいた。少年のウルトランは大声を出して、助けを呼ぼうとしたが怪人に口を抑えられ助けを呼ぶことができない。そんな少年をあざ笑うかのように勝ち誇った笑みを浮かべる。

ババルウ星人「くくっ・・・！」いつに化けて、やられた同胞たちに変わってウルトランたちに復讐してやる！…」

ウルトランボーイ「ううーー！…ううへへ！…」

ウルトランボーイは必死に抵抗してもがくが、虚しくもババルウ星人の前ではまったく通じない。

ババルウ星人「煩い奴だ、少し痛い目に合わせてやる！…」

ウルトランボーイ「！…」

右腕の鋭く光るカッターをウルトランボーイに振り上げた。

ウルトランボーイ（もうダメだ！）

そう思つたその時。

ドンッ！！

ババルウ星人「いてっ！」

細い薄暗い道の中、いつの間にかバルウ星人の後ろ通ろうとマントを羽織つていた通行人がバルウ星人が偶然振り上げた肩にぶつかつた。

ババルウ星人「どこ見てやがる！氣をつけろ！！」

？？？「はあ？」

マントに隠れて顔は見えないが、凜とした澄んだ声に少し低めの声、子供独特の声の幼さぽつさが残つてゐる。少女と思わしきその声は、相手はバルウ星人だともいうのに強気の声音で言い返す。

？？？「あんたが勝手にぶつかってきたんでしょ。なんで私が文句言わねきゃならなの？ちょっとあんた頭大丈夫？？」

ババルウ星人「この野郎ッ・！」

ババルウ星人は、その少女の顔を隠してあつたマントを無理やり剥ぎ取る。少女は嫌がつたが、ハラリと落ち、その場に顔をさらす。そこにはあつたのは、肩まであるぐらいの長めのこげ茶の髪に少し大人びた黒い切り目の瞳。顔立ちは、少女にしては凛としていて大人ぽくかと言つて子供ぽくもある。だが、その顔には自分の意志が強く感じられるようで凜々しかつた。

光「ちょっと何すんのよ！」

ウルトラマンボーイ（「ち、地球人……！？」でも、なんでこんなところに……）

しかも、僕たちと同じサイズだし……ウルトラマンボーイはそんなことを頭の中で廻らせるが、今はそんな時間はなかつた。

ババルウ星人「丁度いい……手始めにお前から切り刻んでやる……！」

ウルトラマンボーイ「あ、危ない！」

ババルウ星人は自慢のカッターで容赦なく光に襲いかかる。ウルトラマンボーイは思わず、声を上げるが、次の瞬間、光の姿が消えた。

ババルウ星人「な、何！？」

どこへ消えた！？

ババルウ星人は周りを見渡すが、光の姿が見えない。気配も音も全てを消して光はババルウ星人の背後につく。

光「うらあ！！」

ババルウ星人「ぐはあつ！」

目にも留まらぬ速さでババルウ星人の頭に回し蹴りを繰り出す。メリッ・・と嫌な音を立てて、壁の中にめり込む。綺麗に着地をし、ビシリと顔が壁にめり込んでいるババルウ星人に指を指す光。

光「元不良なめんな！！『ゴラア！』

しなやかに体についた筋肉にきらりと日に当たり反射の影響で眩しく輝き、宙に靡くこげ茶の髪となんとも言えぬ不思議なオーラにウルトラマンボーイはただその凜々しい少女の姿に呆然と見とれていた。

「ウルトラマンボーイ」・・・・・

か、かつこいい・・・!

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

光「・・・・・・（汗）」

ウルトラマンボーイ「・・・・・」

視線が痛い・・。なんか物凄いキラキラオーラを流してくれるん  
だけどこの子・・。

ウルトラマンボーイ「あ、あの！・・・・

光「ああ・・?何・・?」

ウルトラマンボーイは一瞬躊躇つたように言葉を濁めるが、その後、少し間が開き光はウルトラマンボーイに不審な目を持ちながら聞いた。

光「何か私に用なの？」

ウルトラマンボーイ「そのつ・・・あの・・・」

ウルトラマンボーイはもう思い切って言った。

ウルトラマンボーイ「僕を弟子にしてくださいーーー」

光「ふうん・・つて、はあ・・?」

光はしばらく目をパチクリパチクリ開き、やっと我に返る。

光（（で、弟子！？））

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何故こうなった？

光は考える。始まりはゼロとのくだらない口喧嘩。私は頭にきて、リリーを置いて一人で家を飛び出してここまで来てしまった。結局、

デタラメに歩いてきたせいで迷子になってしまい、適当に彷徨つていたらあいつとぶつかり、気に食わなかつたのでボコッた、それだけだ。なのに、どうして……

「うなるんだ！！

光「断る！」

ウルトラマンボーイ「な、なんで…？」

光「私はそういうのに向いてないし、第一私は弟子なんて取らない！」

それより、早くここがどこなのかを知りたいし……。

光「ねえ、あんたここがどこかわかる？宇宙警備隊本部っていう場所がどこにあるか知ってる？」

ウルトラマンボーイ「え～と…」「めんなさい、僕もここへんの地域は初めて来たからわからないや」

光「なんだ〜・・あんたも迷子なのかよ

光はがっくり肩を落とし、とぼとぼと取り合えず前に歩く。だが・

光「なんで私についてくるーー?」

ウルトラマンボーイ「いや、なんとなく・・・」

光は頭を?きまわし、ウルトラマンボーイもつ啼めた風に投げ捨てる。

光「勝手にしりーーもう・・・!」

そうして、奇妙な組み合わせの一人は光の国を「ララララ」と彷徨うことになった。一緒に行動してる時、ウルトラマンボーイに質問攻めにされて、光はいつもよりどつと疲れる。

ウルトラマンボーイ「あーーそう言えればまだ名前教えてもらつてなかつたねー!君の名前は?」

光「梅崎光・・・」

ウルトラマンボーイ「じゃあ、光師匠だね!」

光「だからならない一つーのー!」

牙を剥いてウルトラマンボーイに抗議するが、ウルトラマンボー

イは特に悪びれる様子はなかつた。

ウルトラマンボーイ「僕はウルトラマンボーイ…よろしくね」

光「はいはい…よろしくね、ガキンちょ

ウルトラマンボーイ「ちょっと！僕の名前はウルトラマンボーイ  
だよ！ガキンちょじゃないよ…」

光「うっさい！あんたみたいなガキンちょは、がきんちょで十  
分よ…！」

ウルトラマンボーイ「そんなのひどいやー…・・・へへ

そんな会話をしている中、話の話題は光がどこから来てどうして  
こんなところにいるのかに変わる。

ウルトラマンボーイ「なんで光は光の国にいるの？」

光「はあ？あんたには関係ない話でしょ

ウルトラマンボーイ「でも普通、地球人の体には光の国の光は  
強すぎてそんな元気に歩けないはずなんだけど…・・・」

なんか訳があるのかな…・?

暫し考えたが、それより光が先にその質問に答える。

光「実は私も分からぬ。つい最近までは、ずっと一緒にいた家族の正体まで知らなかつたんだ。ほんとここに来てから驚くことばつかだよ」

ウルトラマンボーイ「えつ！？もしかして、記憶喪失…？」

光「いや、確かに何か大切なことを忘れてはいるんだが…。なんか、こう…ボンヤリとしていて思い出せないんだ。まあ、私は地球人ではあることは確かなんだけど…。」

光（つて、私…子供に何言つてんだか…。）

はあー…と光は我ながら呆れ返る。ここに来てからというものの性格が…いや、自分自身が知らない自分になつてきている様な気がする。暫らく、歩いていると一つの分かれ道に着いた。どちらに進むか悩んでいると光がどこから一本の棒きれを持ってきた。

ウルトラマンボーイ「それ、何に使うの？」

光「いいから見ときなさい」

光はそういうとその一本の棒きれを地面に落とした。カラソコロンと音を立てて、棒きれは左に向いて倒れていった。

光「よし、左だ」

ウルトラマンボーイ「え、えええーーー?」

て、適当あざわらよ!光!—!

真剣な顔をして迷わず左に進もうとする光を必死に止めるウルトラマンボーイ。

ウルトラマンボーイ「ちょ、ちょっと待つでよー!」は人に道を聞いた方が・・!」

もつともな意見である。でも、光はそれを拒絶した。

光「そいつが嘘をついていたらどうすんのよ?」

ウルトラマンボーイ「そんな・・・誰もそんなことしないよ!」

光「そんなことなんで分かるのよ。それとも何?あなたには他人の心が見えんでもすんのかい?」

ウルトラマンボーイ「そ、それは・・」

確かに全ての人を信じられるかと言われたら無理だけど、光の言  
い方はあまりにひどく冷たいものだった。

光「ほら、やつぱり・・無理だろ?」

ウルトラマンボーアイ「・・それは確かに無理だけど、ここ  
のウルトラマンたちはそんなこと絶対にしないよ!・・」

光「ふうん・・あんたはここが大好きなんだね・・・」

ウルトラマンボーアイ「うん!」

ここには尊敬するユリアンもいるし同じ宇宙警備隊になる夢を持  
つている仲間だつている。ウルトラマンボーアイは純粹にここがただ  
好きだつた。だけど、そんなウルトラマンボーアイに光は冷たく言い  
放つ。

光「私は自分の星・・・地球が大嫌い。そして人も、みんな嫌  
い、大嫌い」

弱いものや醜いものは蔑みられ、反対に強いものや美しいものは  
褒め称えられるあの世界、あの社会が嫌いで仕方がなかつた。

「ウルトラマンボーイ、そんなことないよー！ 地球のみんなは、一つに力を合わせてウルトラマンたちと一緒に怪獣と戦ってきたじゃないか！」

光「地球人がみんなそうって言つわけじゃないわ。あんたが思つているより地球人はね・・・黒くて汚い生き物なのよ・・・」

ポンツとウルトラマンボーイの頭に手を乗せる光。光はすぐに手を降ろし、そのまま左へと足を進めていく。その手は酷く優しく、そして悲しいものだった・・・。

光「ほら、さっさと先に行くわよ。ガキン！」

ウルトラマンボーイ「・・・」

そんな光の瞳を見て、何も言えなくなってしまったウルトラマンボーイ。ゆっくりとただ光の後についていったのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

先に向かって歩いていると、ふとウルトラマンボーイの目の前に  
顔見知りのウルトラマンの姿が見える。

ウルトラマンボーキ「ガイア！アグル！！」

ウルトラマンガイア「おつ！・・・」

ウルトラマンアグルー ボーイじゃないか・・。  
どうしたんだ、

恥ずかしそうにウルトラマンボーイは正直に答える。

ウルトラマンボーキ「実は道に迷っちゃって・・・・／＼／＼／＼／＼／＼」

ウルトラマンガイア「何やつてんだ・・つて、ん?この子は?」

ウルトラマンアグル「ボイの友達か？」

さすがにマントを羽織つてゐる人物が隣にいると目立つ。ウルト

ウルトラマンボーイ「う、うん・・そんなとこかな・・?」

ウルトラマンガイア「そうか。俺はウルトラマンガイア。よろ

しへ

ウルトラマンアグル「ウルトラマンアグルだ。よろしく頼む」

二人は一応、光に挨拶をした。ガイアたちの手にはたくさんの買い物袋がある。どうやら買い物でここに来たらしい。

ウルトラマンボーイ「それより、一人はここから宇宙警備隊本部にさしつけて行けばいいか知ってる?」

ウルトラマンガイア「ああ、それならこの道をしばらく真っ直ぐ進んで、次を右に進むといい

ウルトラマンボーイ「ありがとう—ガイア、アグル!—」

ウルトラマンガイアは光と手を繋ぎ、言われた通りに進む。だが、ガイアに呼び止められる。

ウルトラマンガイア「ちょっと待っててくれ!ボーイ!」

ウルトラマンアグル「私たちも買い物が丁度終わつたところだ。一緒にこよう

ウルトラマンボーイ「うん一分かった!—あつ、荷物持つよー」

光「・・・・・」

結局、四人で荷物を少し分けながら宇宙警備隊本部に帰ることになった。本部の近くに行くとゼロとリリーの姿が見えた。ゼロとリリーが懸命になつて光の姿を探している。そんなゼロたちの姿を見て、少し心苦しくなる。

光「がきんちょ。私はここまでいいわ・・あんがと」

ウルトラマンボーアイ「え? うん・・」

光「今度は変な奴に絡まれるんじゃないわよ」

光は手に持つていた荷物をウルトラマンボーアイに託し、最後は光が自らマントを取り、顔を晒した。光の黒い切り目瞳がウルトラマンボーアイをじっと見る。だが、それはさうとは真逆で、とても優しいものだつた。

光「がきんちょ、一つだけ先に言つとくけど私、地球は大嫌いだけど、別にここは嫌いじゃないわよ・・。何より、ここには・・」

守つてもいいかなつて思えるものがある・・・

そう囁き、ウルトラマンボーアイの隣を通り過ぎ、どこかへと向か

つしていく光。ウルトラマンボーイは慌てて光に声を掛ける。

ウルトラマンボーイ「ま、また会えるよね？」

光はその質問に一瞬ピタリと立ち止まつたが、すぐにまた歩き出し、黙つて前を歩きながらウルトラマンボーイに手をひらひらと振つた。ゼロたちは光の姿を捕え、すぐさま近寄る。

リリー「姫様！…どこへ行かれてたのですか！？心配したんですね…！」

光「あ～、はいはい」

ゼロ「勝手に外に出歩くなつづーの！」

光「誰のせいでこいつなつたと思つてんのよ！だいたいあんたがねえ…！」

ゼロ「なんだとか…！」

ギヤーギヤーと騒ぐ向こうの姿を見て、ボーイとガイアたちと言つと…。

ウルトラマンガイア「あの子があの噂の地球人だつたんだ…！」

ウルトラマンアグル「ああ・・・。顔がマントに隠れて全然気づかなかつた」

アグルたちはただ光の姿を見て、驚きを隠せないでいる。ボーイは・・。

ウルトラマンボーイ「じゃあ・・またねーーっ！光師匠おおーー！」

大声で光に別れの挨拶をするウルトラマンボーイ。ゼロはそれを聞き逃さなかつた。

ゼロ「光が師匠・・・? プツ・・・」

微かに笑いを含んでいるゼロの口調に光のスイッチが入る。

光「ウフフ・・・ゼロオオ・・・! やつぱり、ぶつ飛ばす・・・  
^ ^ ^

リリー「ちょつ！姫様！..どうこう」とですか師匠つてー！？」

傍から見れば光の笑顔は黒い笑みにしか見えないが、ウルトラマ

ンボーアにはそれが照れ隠しのよう見えたのであった。

## 不良な師匠と真面目な弟子？（後書き）

今回はかなりの長文になりました^^(フイー・・・疲れたあ・・・)  
ウルトラマンボーイとウルトラマンガイアの口調(特にガイア)つ  
てこんな感じでいいのかな?ちょっと不安・・・。

これから私は、テスト期間中(生き地獄)になってしまいますので  
もしかしたら、更新が遅れてしまうかもしれません^^(けど、そ  
の分テストと小説も頑張りますのでよろしくお願いします!!)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1843w/>

---

ウルトラマンゼロ～銀河を駆ける天馬～

2011年11月6日10時20分発行